
戦国鎮魂歌～ある漢の天下取り～

w i s h

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国鎮魂歌〜ある漢の天下取り〜

【Nコード】

N5905A

【作者名】

wish

【あらすじ】

現代とは異なった時間が進み、未だに戦国時代が続く別世界。パラレルワールドこの小説では夢に見た戦国武将達のもう一つのお話を進めていきます。

第一話 過去の話（前書き）

この物語はフィクションです（人名・地名・城名を除く）

この小説を読むに当たっていくつかQ&Aを上げたいと思います。

Q：俺の好きな戦国武将が登場しないんですけど。

A：評価欄に載せてくれればよく吟味した上で登場するかしないか決めます。

Q：なんか実際の地名や城の作りが違ってますけど。

A：作者の知識不足ですので具体的にどんどん指摘してください。

Q：なんかキャラが違ってますけど・・・。

A：これはフィクションです。

Q：転んで血が出たんですけど・・・どうすればいいんですか？

A：消毒して絆創膏を貼ってください

第一話 過去の話

時は戦国時代、数多の群雄が興つては消えていった時代である。優れた名君をあげるとするならば……。

織田信長・武田信玄・上杉謙信・徳川家康・豊臣（羽柴）秀吉・伊達政宗・毛利元就であろう。

また知略を持つて敵に立ち向かい、あるいは敵・味方を陥れて主家に乗っ取ったり家中で勢力を伸ばした人物としては……。

竹中半兵衛（織田）・黒田官兵衛（織田・羽柴）・松永久秀（筒井）
・宇喜多直家（浦上）・直江兼続（上杉）・山本勘助（武田）・太原雪斎（今川）などが有力であろう。

古今無双の豪傑と後生に名を残し、今もなお人々に敬意をもたれている武將は……。

本多忠勝（徳川）・服部半蔵（徳川）・前田利益（織田・前田・上杉）
・柴田勝家（織田）・立花道雪（大友）があげられるであろう。そして愚直にまで主君に対して忠義を貫き通した人物と言えば。

真田信繁（武田・真田・豊臣）・石田三成（織田・豊臣）・小早川隆景（毛利）
・後藤又兵衛（黒田・豊臣）であろう。

そんな数多の英傑達を生み出した戦国時代は既に過去の遺物となつてしまった……。

今では彼らの存在を残す文書や碑文が残っているだけである。

だがもう一つの別世界ではまた別の戦国絵巻が繰り広げられていたのである……。

第一話 過去の話（後書き）

えー・・・こんな初心者丸出しの小説を読んでもうござってありがとうございます御座います。

これからどうか政をどうかよろしくお願いします。

第二話 下弦の月の宴（前書き）

早速のご指摘有り難う御座いました。

第一話における訂正：×松永久秀（筒井）

松永久秀（三好）

これからもご指摘お願いします

第二話　下弦の月の宴

- 尾張　清洲城下　足輕長屋 -

尾張を統治する織田信長、彼の一大転機と言える桶狭間の合戦は存命中の今川家軍師・太原雪斎の進言によつて義元による上洛は阻止された。

桶狭間で表舞台に躍り出る機会を失つた織田信長は領国の経営に力を入れ、丹羽長秀・浅野長吉（後の浅野長政）・佐久間信盛・木下藤吉郎らの優れた文官を奉行に命じて石高向上を推し進めていた。野戦や籠城戦において兵糧はまさに合戦を左右する生命線と言える程のものであつた、ちなみにこの時代の兵糧は現代における自衛隊の戦闘糧食（おにぎりとか缶詰とか）と違って一度炊いた米を天日で乾かした物をさすのである。

木下藤吉郎の元に仕えている足輕頭・清右衛門は下弦の月を眺めて静かに酒を飲んでいた、酒と言つても清酒のような高級酒では無く安酒である濁酒である。

一緒に酒を飲むのは童時代からの友人達である松之助達である、彼らは名も無き足輕達であるが天下に志を立てていたのだ。

「よお！！やつてるねえ！！」突然の訪問者に清右衛門達は硬直した、何と上司・木下藤吉郎が妻であるねねを連れてきたのである、藤吉郎の手には大きめの徳利が握られていた。

「き、木下様！！何故このような所に！！」清右衛門が慌てて頭を下げて伏した、それもそのはず木下藤吉郎は二毛作などの優れた耕作技術を発明し信長をして『尾張随一の米人』と褒め称えられて侍大将に昇進していたのだ。

「いかなかね？」 籐吉郎が草鞋を脱いで人なつつこい笑みを浮かべて聞いた、籐吉郎はねねの手を引いて静かに畳の上に座って徳利の酒を清右衛門達の壊れ掛けた杯に酒を注ぎ始めた。

「こ、これは・・・直々に・・・恐縮です」 松之助が頭を何度も下げてその杯の中身をじーっと見始めた、今まで一度も飲んだ事が無い清酒が注がれていた。

「今日は無礼講じゃ！！ 飲め飲め！！」 籐吉郎が笑いながら叫んだ、そのまま宴は楽しく進み踊りや歌声が鳴り響いた、この人なつつこい性格は昇進してからも相変わらずであった。

そして宴は夜中まで続き殆どの者が酔いつぶれていた、無論清右衛門達は疲れて眠りこけていた。

「お前様・・・随分陽気な方達ですね」 ねねが籐吉郎の杯に酒を注いで言った、籐吉郎はうつすらとした笑みを浮かべてコクリと頷いた。

「いざ合戦となったら真つ先に死ぬのはこいつら足軽達・・・ワシも元は足軽だった、だからこいつらの不安はよく解る・・・だからせめてワシがこいつらの不安を受け止めてやらなければならんだろう？」 籐吉郎がボンヤリと夜空に輝く下弦の月を眺めて呟いた。

『木下様・・・』 いつの間にか目を覚ましていた清右衛門が流れそうになった涙をグツと堪えて肩を震わせた、

清右衛門はこの時を境に籐吉郎の為ならば不惜身命の覚悟で働く事を己の涙に誓った。

第三話　清洲評定

織田信長は喜怒哀楽の激しい人物で悪逆非道の第六天魔王と後世では伝えられているが、実際は優れた人物であるのは作者の勝手な考えである。

1) 優れた人材を発掘し、早くから籾吉郎や滝川一益等の有力な人材を発掘していた、また降将にも寛容な処置を施した(例：松永久秀・磯野和昌等)。

2) 自ら政治に深く携わり民と共に祭りと言った行事や灌漑路の建築の指揮を取っていた。

3) 旧体制(幕府・朝廷)を否定しそれに代わる組織を考案していた。

4) 茶の湯などの文化普及の一役を担い、また狩野永徳などの優れた画家の活躍の場を与えた、それだけでなく夜盗同然の武士達に茶の湯や礼儀作法を教え込んだ。

以上四つの事を考えると決して悪逆非道の第六天魔王では無く乱世の名君であつたのでは無いだろうか？

話は下弦の月の宴から二週間後、蝉の鳴き声が止んで代わりに鈴虫などの鳴き虫の心地よい音色が聞こえてくる秋を迎えていた。

だがこの時期は織田家に取って悩みの種の時期でもあつた、美濃の斎藤義興や伊勢の北畠晴具・三河の今川義元等の軍勢が略奪目的で尾張に攻め込んでくる時期であつたのだ。

この日、籾吉郎は信長に呼び出されて初めて評定の間に入った、そこには柴田勝家・丹羽長秀・池田恒興・滝川一益・林秀貞・佐久間信盛らの織田家重臣が側に控えていた。

「木下藤吉郎、ただいま参上仕りました・・・」

藤吉郎が畏まって参上の口上を述べた、信長は上座から静かに藤吉郎を睨み付けていた、思わず藤吉郎は背中に嫌な汗をかいた。

「猿・・・貴様に鳴海城の守備を申し渡す、先に病死した佐久間大
学（信重）に代わり、かの城を守り抜け・・・」

信長が静かにだが良く響き渡る声で藤吉郎に命令を下した、鳴海城は尾張防衛の要であり度々今川勢と小競り合いを起こしていた場所であつた。

「はっ！！しかと承りました！！この藤吉郎、身命に代えて御役目を
はたします！！」

藤吉郎が頭を下げたまま返答した、その時信長がスクツと立ち上がり藤吉郎に歩み寄つた、無論重臣一同が驚いたのは言う間でもない。

「猿、又左（前田利家）・長吉・太田牛一を貴様の与力として使わ
す・・・存分に働けい」

信長が藤吉郎の肩をポンと叩いて言つた、前田利家・浅野長吉・太田牛一は共に藤吉郎とは顔見知りで浅野長吉とは妻ねねの兄で義兄弟の間柄であつた。

ちなみに太田牛一とは後に『信長公記』等の著作を世に残した人物である、また弓の名手でもありその腕前は家中でも一、二を争う程であつた。

「は、はっ！！有り難き幸せ！！では、早々に鳴海に出立します！！御免！！」

藤吉郎が深々と頭を下げて足早に評定の間を出て行つた、残つた重臣達の内柴田勝家だけはどこか不服そうな顔をしていた。

「なんじゃ権六？何か不服でもあるのか？」

信長が不服そうな顔をしていた勝家を見て聞いた、柴田勝家はかつて林秀貞と共に信長の弟である織田信行（信勝）を擁立して謀反を起こした人物であった。

しかし一度敗れて許されたにも関わらずまたも謀反を企てようとした信行を見放し、信長に密告して殺害する様にし向けたのである、その功績により織田家筆頭家老として信長に仕えていた猛将であった。

「何故に大殿はあの薄汚い猿に目を掛けられているのか・・・拙者には理解しがたいです」

勝家が率直に自分の意見を述べた、勝家は小牧山城の守護に付き長年斎藤家と渡り合った人物で新参者である藤吉郎の台頭を理解出来なかったのである。

「勝家殿・・・大殿には何か考えがあるに違いありません、我らが口出する事ではないでしょう」

勝家の隣に控えていた長秀が即座に勝家を諫めた、長秀は知略と政治に長けた人物で信行謀反の時も信長に忠義を尽くして反乱軍と戦ったのである、また史実では足軽だった藤吉郎に早くから目を掛けていてそれとなく助言する事もあった。

だが史実では本能寺の変の後に信長の遺児である織田信孝と共に四国征伐に赴いており、信長死すを知った長秀は信孝を連れて山崎の秀吉軍と合流させたのである、しかし道中信孝が従兄弟である津田信澄を攻めるのを反対したのがかなわなかったのである。

「五郎左の言う通りじゃ・・・余には余の考えがあるのじゃ」

信長がフンと鼻を鳴らして勝家の意見を一蹴した、もし藤吉郎が鳴海を守り抜けば即座に取り立て守り抜けなければ腹を切らせる・・・それだけであった。

信長にとって勝家も長秀も藤吉郎も所詮は自分の道具に過ぎなかった、使えぬ道具は捨てるのが信長の主義であった。

かつて三国時代の魏の王・曹操が『例え罪人でも不義の者でも才能があれば取り立てる』（唯才）と言った様に信長も同じ轍を踏んだのである。

つまりは藤吉郎の才覚を問われた一戦であるのだ、無論それは藤吉郎にとっても百も承知であった。

そして、この戦を切っ掛けに清右衛門達も歴史の渦に投げ込まれ、その存在を世に知らしめる事になるうとはこの時信長も彼ら自身も解っていなかった・・・。

第四話　〜 篠吉郎の決断　〜（前書き）

PC 破損の為執筆が大分遅れました・・・。
申し訳無いです・・・。

第四話　　籐吉郎の決断

- 尾張と三河の国境 -

籐吉郎は鳴海城に着任して早々、今川家の軍勢一万余が尾張と三河の国境地帯に集結しているとの報告を受けた。

籐吉郎は前田利家・浅野長吉・太田牛一・木下小一郎の名だたる将と兵七千八百を率いて鳴海城南方二十里の地点に布陣した。

無論今川家は病死した佐久間大学信重の代わりに鳴海城に赴任してきた『木下籐吉郎』なる人物を評価する為の侵攻であった、いわば小手調べである。

今川家の総大将は幼き頃から今川家の人質として元服して松平元康（徳川家康）以下本多忠勝・本多正信・榊原康政・酒井忠次・鳥居元忠と勇猛果敢で忠実な三河軍団であった。

籐吉郎は早速寄騎衆や足輕頭等を招集して軍議を開く事とした、数の上でも將の質でも劣る織田軍は今川軍と正面から衝突されれば木っ端微塵にされるのは良く心得ていたのである、故に議論が白熱したとは言つまでもない。

「籐吉郎、ここは鳴海城に籠城して大殿の援軍を要請してはどうじやるか？」

籐吉郎とは義兄弟の間柄にある浅野長吉が籠城策を主張した、だが決して籐吉郎は首を縦に振らなかった、信長に気に入られる為には華々しい戦果を上げなければならぬのは重々承知していたのである、もしもここで敵に背を向けて逃げ出せば二度とチャンスは与え

られないのである。

「どうじゃ？ 藤吉郎、ならばいつそのこと敵陣に突撃して一か八かに賭けるか？」

利家がへらへら笑って冗談を言った、利家は藤吉郎とは親友で家族ぐるみのつき合いもしていたのである、その瞬間藤吉郎の顔色が変わっていた事に誰も気が付かなかった。

「利家殿・・・冗談を言ってる場合では無いでしょう」

藤吉郎の実弟・小一郎（秀長）が即座に利家に突っ込んだ、小一郎は元々清洲で農民をやっていたが藤吉郎の出世と共に藤吉郎に仕えた文字通り股肱の家臣の一人であった。

「いや・・・それで行くしかないだろう」

藤吉郎が即座に決断した、全員がまさかと言う顔をして上座の藤吉郎を見た、清右衛門達足軽頭にも無謀である事は即座に解った、相手は精鋭三河軍団、対する織田軍は寄せ集めの半農半兵の兵達であったのだ。

「藤吉郎殿・・・ご冗談でしょう？」

牛一が即座に異議を申し立てた、牛一はかつて信長と共に三河侵攻作戦に加わっていてその手強さを知っていたのだ、勿論織田軍は壊滅して信長はその雪辱に燃えていたのだ。

「たわけ！！ワシら農民から成り上がった者が出世するにはそれしかないじゃろうが！！」

温厚な藤吉郎が珍しく声を張り上げた、藤吉郎は焦っていたのだ、その声に思わず皆が黙り込んでしまったのだ。

「では先陣は俺が務めよう！！」

利家が自ら提案した策に責任を持つかの様に立ち上がった、利家は織田軍でも数少ない猛将の一人でありその名は遠く三河までも聞こえていたのである。

だがその頃対陣の松平軍に二人織田軍を睨み付ける男達が立っていた・・・。

そしてこの男こそが清右衛門にとって生涯の好敵手であり籐吉郎にとって最大の脅威となる男達であった・・・。

一人は戦国最強・本多平八郎忠勝、もう一人は戦国の申し子・松平元康であった・・・。

第四話　〜 篠吉郎の決断　〜（後書き）

意見をくださったオーディンさん！！有り難うございます！！
これからもその言葉を励みにがんばります！！

第五話　鳴海の合戦・上編（前書き）

初めての合戦話ですが・・・もう何と言うか素人丸出（以下略
間違った所があればどうぞ指摘ください
あと・・・評価もして貰えれば嬉しいです

第五話　鳴海の合戦・上編

- 織田軍 最前線 -

藤吉郎の無謀とも言える特攻作戦には皆が一斉に反対したが、藤吉郎の強引なまでの言葉に全員は渋々従わざるを得なかった。

無論、清右衛門達足輕にとっては迷惑この上無い話であった、だが清右衛門はあの下弦の月に誓った言葉を覆す訳にはいかなかった。

「なあ・・・清右衛門・・・ワシ等死ぬんか？」

清右衛門の隣でガタガタと震えていた足輕がボソボソと呟き始めた、この中には初めて合戦に臨む者も少なくなく殆どは実戦経験など皆無であった。

清右衛門は農家の三男坊であったが十三の時に織田家の志願兵募集の高札を見て志願、その後丹羽長秀の麾下に入り織田信勝謀反鎮圧に従軍して足輕頭に昇進したのである。

「解らん・・・戦場で生き残るには相当な強運が必要だからなあ・・・」

清右衛門がボソリと呟いた、事実清右衛門自身も幾度も戦場に赴いたが一度も怪我をした事が無かったのだ。

その時戦場に織田軍の陣太鼓が鳴り響いた、と同時に先駆け隊として前田利家率いる騎馬隊二百あまりが怒濤の勢いで敵陣に突っ込んでいった。

「掛かれい！！」

藤吉郎が自ら馬に跨り勇ましく叫んだ、浅野隊・前田隊・小一郎隊・

太田隊も同時に敵陣目がけて勢いよく突っ込んで行った、清右衛門は得物である長槍を地面と垂直に持ち上げて掛けてだして行った。

本来槍は突く為の物では無く相手を叩き殺す為の鈍器であった、一斉に足輕達が槍を振り下ろして敵の兜目がけて振り下ろすのである。

ちなみに甲陽軍艦におもしろい記述がある、騎馬武者と言えば馬上で勇ましく槍を振り回す姿を想像するが、実際馬上で槍を振るには二つの問題がある。

一、馬上での重心の問題である激しく揺れる馬上で槍を振り回せばバランスを崩して落馬する。

二、片手で馬を御すのは不可能でただでさえ敵味方入り乱れている中では益々馬を御すのは至難の技である。

以上の事から馬上で槍を振り回す騎馬武者は存在しなく、実際は馬で敵を踏みつぶした後に馬から下りて戦っていたのである、これはかの戦国最強と言われた武田騎馬隊も例外では無かった。

「弓隊！！前へ！！各個自由射撃！！」

敵方の総大将・松平元康が麾下の榊原隊に命令を下した、榊原康政と言えば今川家でも本多忠勝と一、二を争う猛将で統率力に優れていた、また多少なりとも策を用いていた、史実では小牧長久手の合戦の折りには豊臣方に向かって秀吉の悪口を叫ばせて秀吉に十万石の賞金を掛けられた程であった。

弓につがえられた矢は勢いよく清右衛門達の陣に向かって飛んで行った、目の前の足輕が顎を割られ倒れざまに胸を射抜かれて倒れた、それでも清右衛門達は前の味方を押して前進し続けた、やがて矢の射程圏外に入った時には既に半数近くが負傷していた。

「うおおお！！退けい！！」

利家が馬で榊原隊に突入して行った、不意を突かれた上に本陣第一部隊の猛攻を直に食らった榊原隊は後詰めの本多隊と素早く入れ替わった。

「がはっ！！」

利家の隣で馬に乗っていた騎馬武者が突然突き出された槍を胸に食らって勢いよく飛んで行った、そこには戦国でも類を見ないほどの豪勇を誇り戦国最強の称号を持つ武神・本多平八郎忠勝が馬上の人となっていた。

「おお！！本多様じゃ！！」

忠勝の姿を見た今川軍の者達が口々に叫んだ、利家はその忠勝の威风堂々かつ剛胆を名体した様な姿に身震いした、戦国最強・本多忠勝に槍を付けられるなんて千載一遇の出来事であったのだ。

「本多忠勝殿とお見受け致す！！俺は織田家侍大将・前田又左右衛門利家！！いざ尋常に勝負！！」

利家が名乗りを上げて忠勝目がけて馬を走らせた、槍を脇に構えて忠勝の胸目がけて槍を突き出した、だが忠勝は素早く槍を捨てると腰の太刀を抜いて槍の穂先を叩き斬った、そうこれが本来の馬上での戦い方であった。

「ぬん！！」

忠勝がそのまま太刀の切っ先を返して横に薙いだ、利家の馬は首を刎ね飛ばされて膝を屈する形で転げた、その衝撃で利家は勢いよく宙に放り出されて腰から地面に叩き付けられた、腰を強打し情けなくも腰が抜けてしまったのである、目の前には太刀を振り上げた忠勝の姿があった。

『も・・・もはやこれまでか・・・』

利家が死を覚悟した瞬間、突然雷光の如き早さで長槍が飛んできて忠勝の馬の頭を貫いた、忠勝は軽く舌打ちすると空中で一回転して見事に着地した、そして槍が飛んできた方を見るとそこには意外な人物の姿があつた。

「き、清右衛門！？」

利家が腰を押さえて叫んだ、そこには槍を投げた格好のまま呆然と立ちつくしている足輕頭・清右衛門の姿があつた、忠勝は戦いに文字通り横槍を入られた事に激怒して利家に目もくれずに清右衛門目掛けて駆けだした。

「に、逃げい！！清右衛門！！お前の勝てる相手じゃない！！」

籾吉郎が忠勝と対峙する清右衛門の姿を見て忠告した、その声にハッとして我に返つた瞬間清右衛門は目の前の光景に改めて度肝を抜かれた、鬼の形相でこちらに向かってくる武將に清右衛門は失神しそうになった。

頭で考えるよりも先に体が勝手に反応した、腰を抜かす様な形で尻餅を突いて横薙ぎの斬撃を避けるとそのまま横に転がって振り下ろしの斬撃をも回避したのである。

「木っ端兵の分際で俺の斬撃を避わすとは・・・お前、名は？」

忠勝は地面にめり込んだ太刀を引き抜いて清右衛門をジロリと睨み付けて聞いた、その冷静な言葉とは裏腹に内心驚いていた、雑魚と踏んだ相手に二度も全力の斬撃を避わされたのである。

「お、俺の名は・・・小牧村の清右衛門じゃ！！」

清右衛門が度盛りながらも名乗りを上げた、くしくもこれが戦国乱世にその名を轟かせる漢の最初の名乗りであつた・・・。

第五話　鳴海の合戦・上編　（後書き）

作者のどうでもいい日記

最近、Battlefield 2にはまってる作者です。

アカウント名はeco-wood(JPN)です（これ言って良いのかな？え、駄目？・・・駄目っぽい？）。

よく日本サーバーで遊んでますんで見かけたら「ああ・・・あいつ満足に小説も書けなくせに遊んでばかりやがって・・・」って思ってください

第六話く鳴海の合戦・中編く（前書き）

戦国最強・本多忠勝と対峙した清右衛門。

お互いを守る者の為に戦う同士の激しい一騎打ちの幕が開けようとしていた・・・。

激闘の鳴海の合戦の中編です。

第六話　鳴海の合戦・中編

戦国最強・本多平八郎忠勝、幼き頃から松平元康に仕え、信賴厚き猛将である。

諸武芸に優れ三方原、関ヶ原と数々の合戦に従軍し、榊原康政・井伊直政・酒井忠次と並んで徳川四天王の副筆頭格でもあった。

その凄まじき武を武田信玄には『家康に過ぎたる物が二つある唐の頭（兜）に平八（忠勝）』・秀吉には『古今独歩の勇士』と賞賛された程でもある。

また三河武士らしく主君には絶対の忠誠を誓っていて伊賀越えの折りにも服部半蔵と共に家康をその身で守り抜いた程であった。

酒井忠次・井伊直政・榊原康政と並んで徳川四天王にも数えられた、また政治手腕にも優れ関ヶ原の戦いの後に桑名に転封した折りに城下町の発展にも貢献したのである。

だが、今は元康に仕える一人の武将に過ぎなかった、元康配下として各地を転戦しその勇名は遠く京にもおよんでいたほどであった。

清右衛門はそんな戦国最強・本多忠勝と対峙していた、逃げだそうとする瞬間に背中から斬られるのは重々承知していたのだ。

「清右衛門殿か・・・その武と度胸誠に見事なり・・・ならばこの本多平八郎忠勝、全力でお相手仕ろう・・・」

忠勝が足下に転がっていた槍を拾って清右衛門向けて言った、清右

衛門も震える手で槍を拾い上げた、この二人の周りでは死闘が繰り広げられていたにも関わらず、二人の耳には己の息づかいだけが聞こえていた。

先に仕掛けたのは忠勝である、忠勝はまるで最上川の急流が如し早さで槍を突き出した、清右衛門は間一髪でその突きを回避し槍を横薙ぎに振るった。

だがそこは歴戦の勇士である忠勝は素早く手首を返して槍の柄でそれを防いだ、それと同時に清右衛門の胸目がけて槍を薙いだ、清右衛門の胸に鋭い痛みが走りなま暖かい血が少し流れ始めた。

「痛っ……」

清右衛門がチラツと胸を見ると鎧は見事に横一文字に切り傷が走ってそこから少しだけ血が滲んでいた、幸い槍の穂先が向かってきた瞬間に身を退いた為に浅い傷で済んだのだ。

『打ち込みは素人並だが……即座に身を退いて被害を軽減させるとは……間違いない、この男はどんどん強くなる……俺と同等、いやもしかすると……』

忠勝が少し息を乱れさせて清右衛門の振る舞いに感嘆した、忠勝は叔父に槍術を学び達人の領域にまで極めたが清右衛門は実戦で技を極めたのである。

その一瞬の隙を清右衛門は見逃さなかった、忠勝が息を整えてるわずかな隙を突いて忠勝目がけて思いっきり槍を投げつけた。

「小賢し……速い!!」

忠勝が槍を振るって清右衛門が投げた槍を叩き落としたが、そこには清右衛門の姿は無かった、しまったと思って下を見ると清右衛門が忠勝の腰に差していた太刀を素早く抜いて斬り付けようとし

ていた。

「うおおお！！」

清右衛門はもう無我夢中で忠勝の大剣を振り下ろした、その刃は斬撃を防ごうとした忠勝の槍の柄を叩き斬り忠勝に軽く食い込んだ、戦国最強の誉れ高い忠勝が生まれて初めて傷を負った瞬間であつた。

「ぐっ・・・完敗だ、我が首持つて武門の末代までの手柄と致せ・・・」

忠勝が激痛が走る肩を押さえて呻いた、これ程の男にならばこの首をくれてやるのは惜しくないと悟つたのである、だがその時既に清右衛門の体力は限界を迎えていて膝が震えて上手く立てずにいた。

「取ろうにも力が・・・ここは退いてくれぬか？」

清右衛門が剣を杖にして呻いた、その顔かには疲労の色が滲んでいた、武術の心得がある者は解るが集中力が極限まで達しその集中力が途切れた瞬間にももの凄い疲労感に襲われるのである。

「ふっ、本当に不思議な男よ・・・その剣は貴殿に差し上げよう、その剣で此度の武勲の証となろう・・・」

忠勝が腰に差していた剣の鞘を清右衛門に投げ渡して言った、忠勝はこの男に惚れ込んでしまったのである、そしてその言葉はまたいつの日か戦場で戦おうと言う意味も含まれていた。

結局清右衛門は忠勝の首を取らずに逃がしてやった、その好意に甘えて忠勝は撤退、清右衛門・利家も怪我により戦線を離脱して行った・・・。

この鳴海の合戦は清右衛門の奮闘により引き分けて終わり、国境にて両軍による睨み合いが半月近く続く事となった・・・。

第六話　鳴海の合戦・中編（後書き）

ようやくテストも終わり一段落付いたこのごろ。
でも結果を見て益々勉強が嫌いになりました・・・。

第七話　鳴海の合戦・下編　清右衛門の改名（前書き）

鳴海の合戦は引き分けて終わった、だがそれは今川家滅亡へ序章に過ぎなかった・・・。

第七話　鳴海の合戦・下編　清右衛門の改名

清右衛門と本多忠勝の死闘から約二週間が続いた、尾張方は打って出る素振りも見せず三河方も城を攻める素振りも見せなかったのである。

元康はこの戦いで木下籐吉郎なる人物に若干の恐れを抱いた、清右衛門の奮闘で忠勝が戦線を離脱した為に今川軍の士気を落ちる所まで落ちたのである。

その様な豪傑を従え、仰天同地の策を用いる籐吉郎に並の戦略は通用しない事を改めて認識したのである、だがそこに思わぬ報告が舞い込んだ。

今川義元が駿府城にて倒れて危篤状態に陥ったのである、そこで元康は師であり今川家軍師・太腹雪斎にこの合戦の和平仲介を求めたのである、雪斎はそれを承諾して鳴海城へと向かった。

- 鳴海城　大広間 -

今、大広間には籐吉郎と前田利家・木下小一郎・浅野長吉・太田牛一そして遙か下座に清右衛門が座っていた。

そして籐吉郎の目の前に座る男こそ今川家随一の戦略家で元康の師匠である太原雪斎が和平の使者として堂々とした態度で座っていた。

「うむ・・・その条件ならばこちらも了承しよう、では義元殿・・・いや新当主・氏真殿には織田家を代表してよろしくお願い致す」

籐吉郎が太原にあくまでも強気な態度で会見に臨んだ、籐吉郎はあ

くまでもこの合戦の勝者は織田家であると言わんばかりの態度であった。

「至極承りました・・・織田殿には私のほうから伝えておきます」
既に齡六十を超えていた雪斎が籾吉郎に頭を下げた、ここに織田と今川双方による事実上の和平が成立したのである。

しかしこの二ヶ月後に太原雪斎、そして今川義元も相次いで病で世を去り、新しい当主・今川氏真を支えるはずであった松平元康も三河で独立し北条・武田・今川の三国同盟を破棄され今川家は歴史の表舞台から消え去ろうとしていた・・・。

- 三ヶ月後 清洲城 -

清右衛門は籾吉郎と共に信長から呼び出しを受けて清洲城に登城した、そこには相も変わらず織田家の重臣達が挙って信長の側に控えていた。

だが合戦前と違って勝家も籾吉郎に対して卑下した考えは持っていなかった、勝家はいつも通り小牧山城の防衛に付いていたが大した戦功も上げられずに信長に叱責されたのである。

「猿・・・此度の役目ご苦労であった・・・お主を部将に任ずる、これから励め・・・」

信長が珍しく機嫌が良さそうに籾吉郎を褒めた、籾吉郎が頭を下げてる間に一人場違いな格好をした清右衛門に視線を移していた、清

右衛門はその視線に気が付いて慌てて頭を下げた。

「清右衛門とやら・・・お主、あの本多忠勝を打ち負かしたと聞くが誠か？」

長秀が信長の代弁として清右衛門に聞いた、既に織田家は籾吉郎と清右衛門の武勲の噂で持ちきりであったのだ、無論長秀もその噂の真偽の定を確かめたかったのである。

「は、はい・・・忠勝殿はこの剣で武勲の証とせよと」

清右衛門が薄汚い袋で包んだ刀を献上するかのように長秀に差し出した、長秀は袋に手を入れてずしりと重い剣を取り出した、その瞬間その場にいた全員が驚きの声を上げた、信長も目を丸くしてその剣を見ていた。

「むう・・・あれは真に本多平八郎忠勝の愛刀・・・噂は本当であったのか」

勝家も思わず唸った、勝家も何年か前に一度本多忠勝と槍を交えたがたまらず逃げ出してしまつたのであった、その本多忠勝を打ち破った者がいると聞いて最初はその噂自体を否定していたが、この目でその剣を見た瞬間に容認してしまつたのであった。

「ガハハハハ！！清右衛門、見事じゃ！！お主こそ家中随一の勇士よ！！」

信長が高笑いを上げて清右衛門を褒め称えた、信長に認められるという事は家中でもその実力を認められ値千金の価値がある事であった。

「は、ははっ！！有り難き幸せに御座います！！」

清右衛門が床に頭を打ち付けるように畏まって礼を述べた、その横で籾吉郎はただ黙って微笑んでいた。

「うむ！！お主を足輕大将に任ずる！！名字帯刀も許可する！！今後は藤吉郎と共に今川攻めに励め！！・・・して、そちは自分の名を何とするのじゃ？」

信長が上機嫌に清右衛門に言った、わずか十七にして織田家の家臣となつたのである、だが清右衛門はあくまでも藤吉郎より身分は下であつた。

「はっ！！恐れながらもこれより須藤清則と名乗らせて頂きます！！」

清右衛門改め清則が頭を下げて言った、元々清則の家系は遡ると清和源氏の末裔で彼の亡き祖父の名・須藤松右衛門から取つた名であつた。

須藤清則、彼は今改めて戦国時代のまつただ中に立つ一人の武将となつたのである、その名はやがて戦国の世に響き渡る程となろうことは信長を始め重臣や藤吉郎、そして本人も知る由がなかつた・・・。

第七話　鳴海の合戦・下編　清右衛門の改名（後書き）

今回は今川家について少しふれたいと思います・・・。
まだまだ未熟ですがなにとぞよろしく御願います。

第八話　曳馬城攻め（前書き）

あゝ．．．なんかもうすみません。

何で謝ってるって？

更新が遅れた事ですょ

第八話　曳馬城攻め

東海地方でも類稀な名門・今川家、その歴代当主は文武に優れた名将が多かった。

今川義元の兄・氏輝・義元とわずか二代に渡って尾張・松平家を支配していたところを見ると武田・上杉・北条に並ぶ程の名門であるのはいうまでも無い。

今川義元の軍師であり教育係であつた太原雪斎の進言により今川・北条・武田による三国同盟が成り立ち、その勢力はますますもって強大化の一途を辿っていた。

だがその今川家の前に立ちはだかつたのが尾張・織田家であつた、長きに渡る攻防戦に終止符を打つべく義元は上洛の準備を整えていたが突如、雪斎が病の身を押して出兵に熱心に反対したのである。

かくして織田家が世間に一躍名を広めるはずであつた桶狭間の合戦は未遂に終わり、再び長きに渡るにらみ合いが続いていた。

だがその威勢を誇つた今川家は今や滅亡の危機に陥っていた・・・その決定的要因が当主・義元と軍師・太原雪斎の死と松平一族の謀反である、歯止めを失つた今川家は松平家討伐を決意し三河に向けて出兵した。

だが酒井忠次・本多忠勝・榊原康政率いる三河軍団二千と木下藤吉郎・須藤清則・前田利家率いる尾張軍団三千の計五千余の寡兵の前に敗北を喫したのである。

- 曳馬城 西方 連合軍本陣 -

松平・織田連合軍は吉田城を出立し今川家の牙城・曳馬城を攻めた、曳馬城主・朝比奈泰朝はわずかな兵で松平・織田連合軍の猛攻を一週間に渡ってかの城を守り抜いていた。

曳馬城は搦手門を太平洋側に突き出した堅城で流石の松平・織田連合軍も攻めあぐねていた、一方信長を総大将とした丹羽・柴田・池田（恒興）・佐久間軍団は墨俣へと進撃していた。

すなわち木下藤吉郎を総大将とした前田・浅野・太田・須藤・小一郎軍は三河攻めの全てを取り仕切っていたのだ、だが信長の気性から言つとこのまま無駄に時間を掛け続ければたちまち後方送りにされるのは目に見えていたのだ。

かつて共に敵であつた松平元康・木下藤吉郎、須藤清則・本多忠勝は過去の経緯を水に流し同じ戦場で戦っていた。

「ご報告致します！！大久保忠世様が負傷なされました！！」
伝令が次々と絶望的報告を本陣にもたらした、大久保忠世は徳川十六神将の一人に数えられる猛将であつたが退却する今川方を深追いしすぎて肩に銃弾を受けたのである。

「何！？忠世が！？・・・解つた、下がつてよい」
元康が忠世の身を案じながらも一軍の大将として気丈に振舞つた、それを知つてか知らずか藤吉郎が元康に忠世を見舞うよう促したが、この土地に不慣れな織田軍のためにも残らねばならないと頑として受け付けなかった。

- 曳馬城内 評定の間 -

城主・朝比奈泰朝以下城兵は寡兵ながらも奮戦していたものの城内は阿鼻叫喚の地獄絵図が如く凄惨を極めていた、既に兵糧も底を尽きかけていて軍馬や城内の片隅で栽培されていた青々としていた野菜まで喰らい尽くされていた。

当然下々の兵にまで食料が行き渡る訳では無い、中には死んだ同僚の血肉を喰らい生き永らえている者も多数いた、ほかにも烏や虫をも喰らう有様だから当然の餓鬼地獄であった。

海に面しているのにも関わらず本拠地・駿府城からは援軍のみならず米の一粒すら到着する気配が無かった、実は一枚岩に見える今川家でも曳馬城主・朝比奈泰朝と重臣・岡部元信との間に確執があったのだ。

かつて義元上洛未遂の折には太原雪斎に説得され共に義元説得を試みた泰朝と上洛を最後まで主張し続けた岡部元信の間には深い溝が横たわっていたのだ。

泰朝は元信に対して詫び状と救援要請の旨が記された書状を送ったが、元信はこれを握り潰し泰朝以下曳馬城の兵達を見捨てたのである。

打って変わって攻め手よりは本多正信・石川数正・木下小一郎が降伏を促す使者として幾度も訪れていたが忠義と現状の間で揺れる泰朝にはイマイチ決め手に掛けていた。

考えに考え抜いた末、一か八かで藤吉郎は清則を降伏勧告の使者として送り込む決断を下した、同じ武人としてこのまま干殺しにされる泰朝を見捨てられないと清則が主張したからである。

「泰朝殿、貴殿等城兵の忠義と奮戦はこの須藤清則のみならず織田・松平両家の武士を感激させる物があり申した・・・降伏は恥ずべきことにござりません・・・何卒このまま無為に戦を続けるのを御止めくだされ」

清則が鎧を纏ったまま降伏勧告の使者として泰朝の説得を開始した、登城途中城のあちこちで見かけた凄惨な光景に思わず涙していたのである。

「・・・」

泰朝は腕を組んだまま黙り込んでしまった、例えここで功績を挙げても氏真の側近である岡部元信に握りつぶされて逆に有らぬ罪で切腹させられる恐れがあったのだ。

「元康公も貴殿を厚く迎え入れて重く用いてくださる事を約束なさっています、城兵の為・・・しいては貴殿の御為にもここは降った方がよろしいかと」

清則が少し強引な感じに泰朝の心を揺さぶった、清則達は事前に伊賀忍軍・服部半蔵から得た情報で岡部元信と朝比奈泰朝の中が険悪になっているのを知っていた、そしてこの曳馬攻めで泰朝が窮地に陥っている事も。

だが敢えて泰朝を降らせたのは藤吉郎の策謀であった、今川家一の忠義者と呼ばれた朝比奈泰朝が松平・織田軍に降伏したとあらば今川領内の将兵や民の戦意を削ぐのには十分過ぎるである。

「清則殿・・・真に元康殿は某を重く用いてくださるのであろうか

？」

泰朝が清則の顔をじつと見て聞いた、このまま今川家にいても栄達は望めない、ならばいっそのこと松平家に仕えて憎き岡部一族を討ち滅ぼし松平家で栄達を手にするのが得策と考えたのである。

「武士に二言はござらぬ・・・信用できぬとあらば、この清則が誓書を書きましようか？」

清則が確かな手応えを感じて最後の難関を突破しようとした、この悪戯っぽい満面の笑顔と自身に満ちあふれた声に泰朝はついに折れた。

曳馬城陥落と朝比奈泰朝降伏の報告は今川家中を混乱の渦に陥れた、次々と国人衆や水軍衆が今川家に見切りを付けて松平家に鞍替えして行った。

今川家当主・氏真は北条・武田家に対して援軍を求めたが北条家当主・北条氏康は『墜ちる烏に差し伸べる手は無き事にて候』と出兵を拒否。

武田からは老兵二百騎と古くなった兵糧五百石が送られてきた、事実上三国同盟は崩壊し今川家は一人孤立する事となったのである。

第九話〜元康の謀略〜（前書き）

評価御願います

第九話　元康の謀略

朝比奈康朝降伏に先立ち今まで今川家に対して忠義を尽くしてきた国人衆・水軍衆は相次いで今川家に見切りを付けて松平・織田連合軍に鞍替えし、その先兵として今川家領をジワジワと侵し始めた。

そしてついには今川家最後の城・駿府城（興国寺城は既に武田家の攻撃によって陥落）に籠城して城を枕にして討ち死にする覚悟でいた。

城を攻囲して早三日が経過した、駿府城に立て籠もる今川軍二千による必死の抗戦も虚しく大手門・二の丸共に陥落し残るは本丸のみとなっていた。

だが以外にも本丸の守りは堅くまたもや戦況は膠着状態に陥った、その頃信長は墨俣を包囲するも稲葉山城の軍勢に敗北し小牧山城に引き上げていた、信長は籾吉郎に対して速く今川家を攻め滅ぼし美濃攻めに加わるように矢のような催促を繰り返していた。

そこで籾吉郎は須藤・浅野軍三千二百を残して尾張へと引き上げて行かざるを得なかった、元康に後事と兵を託し籾吉郎は東海の地を去っていった。

ある日元康は諸將を呼び集めて軍議を催す事とした、このまま今川攻めが長引けば三河に武田軍が流れ込む恐れがあったのだ。

「さて・・・諸将等に集まって貰ったのは他でもない・・・今川家と和議を結ぼうと思う」

元康が開口一番に和議と言う言葉を口にした、籐吉郎からは『決して和議を結ばず今川一族ことごとく討つべし』との言葉を貰っていた須藤にとって意に反する事であった。

「元康殿！我ら納得する事ができません！！」

須藤と浅野が勢いよく立ち上がって元康に噛み付いた、自分達がここにいるのは今川家を攻め滅ぼす為であった、のうのうと和議を結ぶ為では無いと続けて言った、それでも怒り収まらず浅野は本当に和議を結ぶつもりならば我ら織田軍は撤退すると脅迫したのである。

「須藤殿に浅野殿、まずは落ち着かれよ・・・」

松平軍参謀・石川数正が須藤と浅野に対して着席を促した、数正自身もどこか腑に落ちないがとりあえず話だけでも聞こうと須藤達を説得した。

「これは真の和議に非ず・・・これは偽りの和議である、かつて北条家の始祖・北条早雲が難攻不落の小田原城を落とした際に用いた策だ」

元康が諸将に解りやすく説明した、つまりは謀略を持って今川家を討ち滅ぼすと言う訳であった。

その言葉を聞いた須藤達は自分達の非礼を深く詫び謝罪した、その後元康は諸将達に撤退準備をするように見せかける旨を伝えた。

元康一世一代の大博打は果たして吉とでるか凶とでるか・・・今はまだそれは誰にも解らなかった・・・。

和議は成り大方の兵は引き上げていった、だが夜も更け咳払い一つ立てずに城に近づく少数の部隊があつた。

須藤清則・本多忠勝・浅野長吉・酒井忠次・朝比奈泰朝・渡辺守綱・服部半蔵の猛将を含めたたった十数名の少数精鋭特攻部隊である、本隊は高天神城東方十里にて待機し、合図と共に城に攻め込むはずであつた。

城方は和議が成つたと大喜びで城兵総出で宴に興じていた、まず半蔵と伊賀忍軍数名が音を立てずに城内に侵入し門番と櫓の兵を毒を塗つた棒手裏剣を喉に突き立てて一撃で沈黙させた。

半蔵以下伊賀忍軍は手早く大手門の門を開け忠勝達を中に招き入れた、忠次と長吉が兵の詰め所に火を放ち肝を潰し逃げ出してきた今川の兵達を忠勝・清則・守綱等猛将が悉く討ち取つた。

その間に半蔵は泰朝の手引きで兵糧庫・火薬庫に火を放ち本丸へ向けて次々と破壊工作を続けていた。

「忠勝殿！！危ない！！」

清則が大太刀で忠勝に斬りかかろうとした雑兵を素早く斬り捨てた、三対百あまりの兵力差にも関わらず三人は互いに互いの背中を預ける形で陣を敷いた、例え死合いと言えどもそれは合戦と何ら変わらなかった。

「清則殿！！かたじけない！！」

忠勝が槍で雑兵の斬撃を受けて礼を述べた、かつては生死の境をのぞき込む様な一騎打ちをした二人だが今は互いに背を預けている・
・この二人の旨に去来する物は何であるうか・
・それは苦々しい私怨では無く戦国に生きる清々しい武人の性であつた。

「すっかり囲まれましたなあ・・・」

守綱が少し息を整えて辺りを見た、辺り一面には焼け出された雑兵達が着の身着のままながらも手にそれぞれ得物を持っていた。

渡辺半蔵守綱、松平家に置いて『槍の半蔵』の異名を取った槍の使い手で服部半蔵と併せて『両半蔵』と恐れられた猛将である、この時はまだ松平家に仕えるしがない足軽頭であった。

「どう致す？清則殿・・・」

忠勝が槍の柄を強く握りしめて聞いた、このまま斬り続けても埒があかないのである、それに元康率いる強襲部隊が合図を今か今かと待ちわびていたのである。

「守綱殿・・・俺達が血路を開くから元康殿に合図を・・・」

清則が太刀の柄を握り一息付いて言った、合図は鎬矢を勢いよく上に打ち上げるだけであつたが、その隙が防戦一方の清則達には見つけられなかつたのである

「そんな・・・俺はまだ戦えます!!」

守綱が思わぬ事を言われて面食らつたが即座に反論した、もしもに備えて一人一本の鎬矢を所持していたのである。

「その傷では満足に戦えまい・・・ここは清則殿の言うとおりにするんだ!!」

忠勝がちらりと守綱の肩の傷を見て怒鳴つた、戦いの最中守綱は肩に怪我を負つたのである、他の二人は満足に手傷すら負っていないかつた。

「行くぞ!!忠勝殿!!走れ、守綱殿!!」

清則が思いつき駆けだして敵に斬り込んで行った、それと同時に忠勝も槍を振り回して敵に突っ込んでいった、思わぬ反撃を受けた雑兵達は動揺して守綱を追う事が出来なかった。

「ええい！！構うな！！奴らの首を上げよ！！」

足輕頭らしき男が動揺する兵達に命令を下した、だが戦国最強と呼ばれた二人の勢いは止まらなく次々に討たれて散っていった。

二人の活躍もあり守綱は櫓の上から鎗矢を射た、鳥の鳴き声に似た音が闇夜を切り裂くように鳴り響いた、この音を聞いた元康軍本隊は怒濤の勢いで馬を駆けさせて駿府城を強襲した。

第九話〜元康の謀略〜（後書き）

作者のどうでもいい日記

今日、TBSサイトで注文した最終話収録某RM第二期DVDが到着。

だけど・・・何回見ても軽く鬱になるなこれ・・・

第三期放送をわくわくして待っている俺は阿呆なのか・・・それとも薔薇しんs（ry

第十話　今川家の最後　（前書き）

今日はがんばって二話投稿してみました。

第十話　今川家の最後

火の手が上がった事に気が付いた清則・忠勝・泰朝の三人は群がる敵を薙ぎ倒して本丸御殿に突入した。

炎の中では既に氏真は自害して果てていた、だがその傍らでは静かに佇む鎧武者の姿があった、岡部元信その人であった。

「裏切り者め・・・ようやく来たか」

元信が鞘から太刀を抜き払い鞘をそのまま炎の中に投げ込んで呟いた、その目は憎しみをありありと映していた、泰朝は清則が止めるのも聞かずに静かに元信の前に立ちはだかった。

「元信・・・お前は道を誤った、御館様を支えねばならなかった我らがこうして憎しみ合わねばならぬ事はワシは我慢できなんだ・・・」

泰朝が太刀を抜いて元信に切っ先を突きつけて呻くような声を上げて元信を静かに睨み付けた、この二人の間に清則もそして忠勝ですら割ってはいる事は出来なかった。

「おい・・・その二人、この死合いの検分役・・・頼めるか？」

元信が切っ先を忠勝と清則に向けて頼みこんだ、二人はただ黙って頷くしか無かった、あちこちで火災による崩落が起こり危険な状況であったが何故か彼らの周りにまで危険がおよぶ事は無かった。

泰朝・元信ともに同時に斬りかかり刃がぶつかり合う度に火花が飛び散った、炎の中で行われる一騎打ちに清則と忠勝は身震いするような美しさを感じた、それは武人にとって最高の舞台とも言えた、

二人にはもはや己の息づかい以外何も聞こえない武の聖域を感じ取っていた。

何十合と打ち合ったにも関わらずまだ勝者が決まらなかった、互いに息が上がり最後の渾身の一撃をすれ違いざまに放った、清則と忠勝は生唾を飲みどちらが先に倒れるのかと目を見開いてじつと凝らしていた。

「ぐっ・・・」

先に膝を突いたのは泰朝であつた、鉄拵えの鎧の胴の部分が切り裂かれて鮮血が迸っていた、だがその直後元信が剣を地面に落とし力ツーンと寂しい音が鳴り響いた。

「や、泰朝・・・」

元信が崩れ落ちるように倒れながら呻いた、泰朝の一撃は元信の胸を深く切り裂いていたのである、結局それが致命傷となり元信はそのまま落命した、最後の瞬間彼が見たのはもしかして義元に召し抱えられて好敵手・泰朝と功を競い合った懐かしい日々だったのかも知れない、だがそれを知る術は三人には無く、元信も物言わぬ骸と化していた。

「清則殿・・・これを持って行つてくだされ宗近三日月でござる」

泰朝が氏真の近くに転がっていた今川家の名刀・宗近三日月を震える手で清則に手渡した、いわばこれが氏真の首の代わりと言う訳であつた。

「し、しかし・・・」

清則が慌てるのも無理がなかった、既に火の手は三人をすっかり取り囲んでいたのだ、このままでは三人とも焼け死ぬだけであつた。

「心配無用・・・ここから外に出られる・・・さあ！！」

泰朝が体を引きずって掛け軸の裏に付いていた取っ手を引っ張った、そこには城外に通じる秘密の抜け道へと続く階段があった、幸いそこにはまだ火の手も煙も回っていなかった。

「泰朝殿は・・・！？」

忠勝と清則が階段を下りようとした瞬間、辺りが突然暗闇に包まれた後ろを振り返ると天守御殿へと通じる戸が堅く閉ざされていた。

「っ！！泰朝殿！！」

清則が戸に体当たりしても戸はビクともしなかった、もう一度体当たりを試みたが忠勝の手が清則の腕を掴んだ、忠勝は無言で頭を振ってあきらめる様に促した忠勝はうつすらと目に涙を浮かべていた、清則は静かに俯き無言で涙を流した、だが泣いてばかりはいられないと言わんばかりに手の甲で涙二人は薄暗い階段を駆け下りて外へと目指した。

「義元様・・・氏真様・・・清則殿・・・元信・・・」

紅蓮の炎が辺りを包み込む中、泰朝は戸にもたれて自分の最後を悟った、もう立つ事も自害する事も叶わぬほどに出血が酷くそのまま泰朝は深く目を瞑りうつすらと笑みを浮かべたまま二度と目を開ける事は無かった。

最後の瞬間泰朝の脳裏には若き頃に大志を自分と元信に語ってくれた今川義元と今川氏真、閑職に送られた自分にもう一度活躍する場を与え最高の舞台を見届けてくれた須藤清則。

そして・・・共に戦場を駆けめぐり、共に功を競い合った同僚・岡部元信の姿が鮮明に写った、互いに道を違えども最後は一騎打ちの中で意思疎通できた事を嬉しく思った・・・だがそれを知る者もまた元信の時と同じく誰もいなかった。

やがて炎は元信・氏真・泰朝の骸を優しく包み込み本丸全体をも包み込んでいた……。

城外に出た二人は闇夜の空に舞い上がる火の粉をまるで三人の魂が浄土に向かって舞い上がっていくかのような幻想的な場面をしかと目に焼き付けた。

武人にとって最高の舞台を見た事による感謝と三人の霊を慰めるかの様に二人は静かに手を合わせてその場を後にした……。

今川氏輝・今川義元・今川氏真と三代に渡って勢力を拡大し続けた今川家はここに滅び去った、皮肉にも今川家の滅亡により戦国の世は益々混沌とした時代へと向かいつつある事をまだ誰も知らなかった……。

第十話　今川家の最後　（後書き）

武士としての本望とは一体何なんでしょう・・・。

やはりこの平和な時代に生き平和を貪る俺達には絶対解らないの
でしょうか・・・。

でも確かな事は・・・彼らの粗々しくも美しい血は我々現代人の血
にも流れているのは確かでしょう・・・。

第十一話　平和な日常

- 二週間後　小牧山城　大広間　-

須藤は今川攻めを終えて残留組を伴い尾張に凱旋、そして織田家にとって強大な敵であった今川家を滅ぼしたその実力は既に織田家でも一目置かれるようになっていた。

ある日清洲にて療養していた須藤の元に小牧山にて美濃攻めの指揮を執っていた信長から突然招集が掛かり須藤は急ぎ小牧山城へと登城し信長に謁見した……。

「清則……改めて先の今川攻め見事であつた……」

信長が普段と変わらぬ険しい表情で目の前に鎮座している須藤を睨みつつ聞いた、だが須藤は信長が怒ってはいない事は解っていた、どこか涼やかな風が信長の心に吹き荒れている気がしていたのだ。

「はっ！！ 籐吉郎様が美濃攻めに加わると聞き、未熟者ながらも指揮官の大役を仰せつかりました！！」

須藤が頭を下げて信長に上奏した、事実須藤は今川攻めにおいては功績第一であつたが生来主君を立てる謙虚さを持ち合わせていて、凱旋後も昇進や加禄の話が持ち出されたが全て丁重に断っていた。代わりに籐吉郎の昇進を嘆願した程の忠義者で信長をして『猿には過ぎたる者』と褒め称えられた程であつた。

「して……お主は松平元康なる人物をどう見る？ 思うまま述べてみよ」

信長が突然話題を変えて須藤に問いかけた、今川家は滅び去つたが

代わりにもつと強大な敵になりうる男が現れたのを気に掛けていたのである、そしてその男の元で今川攻めに参加し最も近くにいた須藤を呼びつけたのである。

「・・・恐れながら申し奉ります、松平元康なる人物は軍略や知略に長けているだけでなく本多忠勝・酒井忠次等の名将からも慕われ領民からも敬われております・・・正直に申しますと某はかの男と戦うのは避けた方がよろしいかと存じます」

須藤が元康に従ってきた半月で見た事全てを信長に報告した、いかに信長と言えども元康と正面を切って衝突すれば負けはせぬが代わりには大打撃を被る事は分かり切っていたのだ、故に戦うのでは無く同盟を結び強力な味方にすれば万事滞りなく進む事を進言した。

「お主ほどの漢がそこまで言うのであれば事実であろう・・・」

信長が腕組をしてボソリと呟いた、既に信長は須藤に対して藤吉郎たち重臣と同じく絶大な信頼を置いていたのだ、信長はそのまま黙って頷くと長秀をジロツと見た。

「はっ・・・」

長秀がスツと頭を下げて前に一歩進み出た、長い間信長に仕えている重臣達は信長の目線を感じた場合は即座に動ける体勢を取るのが常識であった。

「長秀、松平家との同盟交渉の全てを任せる・・・須藤、ご苦労であった・・・引き続き猿の元で励めい」

信長が長秀と須藤にそう命じた後スクツと立ち上がってそのまま奥へと下がって行った、信長が須藤の進言を聞き入れたのである。

それは須藤が押しも押されもせぬ織田家の重臣としての地位を確立した瞬間であった、だがそれを快く思わない者がいた。

「ちつ・・・成り上がり風情が調子に乗りおつて・・・」

織田家侍大将・滝川一益である、伊賀の出身で伊賀忍術を極めた忍武将として織田家でメキメキと頭角を現していたのである。

彼は自分が一番信長に信頼されていると思ひこみ自然と須藤に対し敵対心を抱いていたのである、無論一益から発せられる険悪な空気を須藤も読んでいて互いに口も聞こうともしなかったのである。

- 木下隊 野营地 -

須藤は城から出るとその足で藤吉郎の元を訪れた、この時藤吉郎は木曾川に住む古くからのつき合いである野武士集団・川並衆を謀略し蜂須賀小六を配下に迎えていたのだ。

「おい、その兄ちゃん・・・あんた強そうだねえ、どうだい？俺と手合わせしねえか？」

薄汚くボロボロになった鎧を着た青年が突然須藤の前に立ちはだかつてニヤニヤ笑い始めた、須藤も直感でこの男がただ者じゃない事を悟った。

「・・・いいでしょう・・・」

須藤が小太刀の柄に手を掛けてキツとその青年を睨み付けた、だがその青年はニヤニヤ笑うばかりで一向に打ち込んでくる気配を感じなかった、どんなに須藤が闘気を叩き付けても全く反応を見せないのである。

痺れを切らした須藤が勢いよく刀を払うとその青年も同時に刀を払った、火花が散った次の瞬間両者の刀は真つ二つに折れていた。

「小六つあん・・・幾らあんたでも無理だよ・・・良く帰ってきたな清則・・・」

騒ぎを聞きつけた籐吉郎が陣幕を捲つて青年に声を掛けた、そう彼こそが蜂須賀党の頭であり川並衆の長・蜂須賀小六であつた。

蜂須賀小六正勝、秀吉の覇業を支え続けた名将で墨俣築城の折りに秀吉に仕え秀吉の天下統一が成るとその功績から四国を与えられるも直ぐに家督を嫡男・家政に譲つて隠居したのである、ちなみにこの男は武勇だけでなく知略に長けてもいて秀吉に仕えた最初の参謀と言つても過言では無かつた。

「籐吉郎様、ただいま戻りました・・・」

須藤がスツと折れた小太刀を鞘に戻して籐吉郎に向けて頭を深く下げた、籐吉郎は須藤の肩をポンポンと叩いて労つた、須藤にとつてこれが何よりの褒美と言つても過言では無く、どこかくすぐつたいような気持ちになつた。

「清則？・・・あんたもしかして・・・あの須藤清則かい？」

小六がちよつと驚いて須藤に聞いた、その顔は親にしかかられている子供みたいなどこか情けない顔をしていた、その顔に思わず須藤は苦笑いを浮かべてしまつた。

「如何にも・・・某が須藤清右衛門清則です」

須藤がそう言つて頷いた、それを聞くや否や小六は小さく悲鳴を上げて一歩下がつた、そしてマジマジと清則の顔を見てどこか安堵の息をついた。

「失礼しました、俺は蜂須賀小六正勝と申します・・・お目に掛けて光栄です・・・それにしても噂と違つて聡明な顔立ちをしておられる」

小六が即座に自分の非礼を詫びてケラケラと笑つた、一体どんな噂が流れてるんだよ・・・と須藤は少しあきれかへつた。

「ほお？どんな噂が流れてるんですか？小六殿？」

藤吉郎の後ろから現れた小一郎が空気を読まずに聞いた、そう聞かれては断る訳にも行かず小六は渋々口を開き始めた。

「かの男、口は耳まで裂けて体重は百貫を超え・・・合戦の折りに敵味方の死体に食らいつき飢えと乾きを癒し、その豪腕で大岩をも軽々と持ち上げて敵に向けて投げつけると・・・」

小六が気まずい雰囲気の中でボソボソと答えた、その現実離れた答えに思わず全員が噴き出してしまった。

第十二話　竹中半兵衛重治　前編　（前書き）

今回のお話は太公望や諸葛亮ネタが若干混じっております・・・（
解る人には直ぐ解りますね）

後wikiを参照した事をここで報告させて貰います

第十二話　竹中半兵衛重治　前編

- 墨俣城 -

武神・須藤清則が加わった藤吉郎軍はおよそ三割の死傷者を出しながらも墨俣城を奪取し、この地に兵糧や武器弾薬を運び込んでいた。ちなみにこの墨俣城は美濃防衛と尾張進攻を兼ねた戦略的要所で美濃随一の知将・竹中半兵衛重治が築城案に賛同する諸将と結託して自費で築城したと言っているのである。

正面より須藤軍がそしてその側面を突くように小六率いる川並衆の筏部隊が突き激闘の末に落城したのである、この合戦で織田家は美濃進攻への重要な橋頭堡を得たのである。

墨俣落城を聞いた信長は大喜びで直ぐに全軍を率いて北上を開始した、それと入れ違いに藤吉郎・小一郎・須藤は城を出て美濃三人衆（安藤・稲葉・氏家）と竹中半兵衛の謀略の準備に入った。

斎藤家当主・斎藤龍興は祖父・斎藤道三や父・斎藤義龍の一族とは思えぬほど愚鈍な男で昼間から酒色に溺れて重臣達の意見など採り入れず自分を褒め称える様な甘言家達を側近として仕えさせる等と乱雑な政治を行っているせいか、次第に家臣達の心が離れていってしまっていたのだ。

そんな龍興を諫める為に軍師・竹中半兵衛は親族の者である安藤守就と共謀してわずか十数名の兵を率いて稲葉山城を奇襲しこれを奪ったのである、半兵衛は直ぐに城を龍興に返上して隠遁したものの

龍興とその家臣の間に不穏な空気が漂っていたのは言うまでも無い。

「竹中半兵衛さえ味方に引き込めばその親族である安藤守就を初めとして稲葉一鉄・氏家ト全を謀略するのは容易い・・・が前田殿ですら無理だった御仁じゃ・・・容易くは行かないもんじゃ」

藤吉郎が斎藤家の主立った家臣達の名が記された紙を扇子でペシペシと叩いて説明した、その目は連戦に次ぐ連戦で疲れ切っていた、無論清則も先の合戦で怪我をしていたが無理をして軍議に出席していた。

「いや、本当にあの時は面目無かった・・・」

普段から陽気な利家が珍しく意気沈静に詫びを入れた、利家は半兵衛謀略の為に半兵衛の娘・千里と懇意の中になり彼女を介して半兵衛に謀略の手を伸ばしたが半兵衛はそれを知らぬ顔をして千里に命じて逆に織田軍の戦力などを聞き出し、第一次墨俣合戦において織田軍敗北の要因を作ったのである。

ちなみにこれが後に「知らぬ顔の半兵衛」と言う諺になったのである。

「その御仁・・・是非とも軍師に欲しい逸材ですな」

清則がふと思いついたかの様に藤吉郎に進言した、不幸にも藤吉郎軍には浅野長吉・木下小一郎の名だたる文官を抱えていたがいずれも軍師とは呼べない代物である、また清則・小六自身も度々藤吉郎に進言する事はあるがせいぜい参謀格程度である。

「軍師か・・・それは思ってもみなかったわい・・・」

藤吉郎が少し小さめな声を出してボソリと呟いた、小一郎も納得がいったのかうむうむと首を縦に振った。

- 竹中半兵衛隠居地 近江と美濃の国境地帯 栗原山 庵 門前

清則は籐吉郎の命を受けて半兵衛が隠居している栗原山中の庵を訪れた、門前で掃除中の半兵衛の娘・千里を見つけ声をかけた。

「あの・・・竹中半兵衛様はご在宅でしょうか？」

清則が千里に声を掛けた、千里の方は突然現れた武士に警戒心を見せて持っていた箒をギュツと握りしめて身構えていた、正直清則は声を掛けるべきか迷ったあまりにも千里が周りの風景に溶け込む程美しかったのである。

「は、はい・・・どちら様でしょうか？」

千里がおどおどして聞いた、かつては友人と思っていた利家に裏切られた心傷故で人間不信に陥り掛けていたのである。

「あ、これは失礼致した・・・某は織田家足輕大将・須藤清右衛門清則と申します」

清則が笠を取って自己紹介した、それを聞いた途端に千里は目の色を変えた、その色は憤怒のような深い悲しみの色であった。

「お帰りください！！織田家の人間には父上はお会いになりません！！」

半ばヒステリーに叫んで箒を抱えたまま門の内に叫び勢いよく門をボタンと閉めて鍵を掛けてしまった。

（やれやれ・・・一筋縄にはいかんのう・・・全くを持って前途多難じゃのう・・・）

清則が庵へ続く石段を下りながら一人先が思いやられると珍しく弱気に思った。

その晩清則は籐吉郎に対して半兵衛謀略に時間が掛かる旨を記した書簡を送っている、それから二日間通い詰めたが門前払いを食らうばかりで一向に竹中半兵衛なる御仁の顔すら拝めずにいた。

既に籐吉郎から貰った旅費も尽きた為に仕方なく門前で石段を枕にして一晚を過ごす事にした、だがこの決断が思わぬ奇跡と呼ぶ事になった。

目が覚めた清則はまた千里に声を掛けたがやはり門前払いを食らってしまった、困り果てた清則だがあきらめる訳には行かず近くの川で魚を釣り朝食を取ろうとした、だがそこには既に先客とおぼしき青年が一人糸を垂らしていた。

「おや？御武家様、このような所で釣りですか？」
青年が清則を見かけて声を掛けた、その顔は青白く見るからにどこぞの過保護な親に育てられた若旦那風であつた。

「ええ・・・腹が減つてはなんとやらと申しますのでね」
清則がその青年の隣に腰を下ろして釣り糸を垂らし始めた、暫く糸を垂らしているとふと青年がまた声を掛けてきた。

「はて？御武家様はこの大名家にお仕えしておられるのです？」
青年が不思議そうな顔をして清則に聞いてきた、清則も釣れぬ苛立ちと空腹を紛らわす為に青年の問いかけに答えようと思った。

「織田家の部将・木下籐吉郎様にお仕えしております・・・」
清則が少し顔を崩して答えた、郷に入つては何とやらで本意を持つて人と接する様に心得ていたのである。

「ほお、木下藤吉郎様・・・その木下様なる御仁は如何なる人で？」
織田家と聞いた時若干青年が動揺したかに見えた、だが清則は武家と接する事で多少緊張しているのだなと勘違いした。

「素晴らしいお人ですよ木下様は・・・俺は元々家柄も無いしがない足軽でしたが木下様や信長様に認められて足軽大将にまでして頂きました・・・」

清則が嬉しそうに藤吉郎の事を話し出した、鳴海での合戦の事や今川攻めで総大将に任命された事も全て破顔の表情で話した、青年は時折相づちを打って色々と質問してきた。

「して・・・このような所にはなんの御用で？お忍びでいらっしゃる所をお見受け致すと斎藤家か浅井家への間諜ですか？」

青年が釣った魚を魚籠に入れながら聞いた、清則はその問いかけに答えるべきか否かを迷ったがこの青年に気を許していたのか思わず喋ってしまった。

「竹中半兵衛重治殿を藤吉郎様の軍師としてお迎えに参った次第です・・・あのお方ほどの知恵者が軍師となっていただければと思うと・・・」

清則がまるで自分の事の様に半兵衛の事を褒め称えた、稲葉山乗っ取りや知らぬ顔半兵衛の事全てを話し始めた。

そうこうしている間に日はすっかり昇り正午を過ぎていた、釣果は目も当てられぬ程のぼうずであった。

「御武家様・・・どうですか？我が家で昼食など・・・」
青年がポンポンと自分の満杯になった魚籠を叩いて昼食に誘った、何も釣れず山中に入って山菜やキノコを採って食べようか迷っていた清則に取ってはまさに助け船であった。

「かたじけない・・・ご相伴にあずかせて頂きます」

清則が心から感謝の言葉を述べた、青年の住む家への道中どこかで見た場所を何度も見た、そして青年に案内されたのは・・・。

「ここが我が家です・・・家と言っても見窄らしい庵で御座います
が」

青年が案内したのは何と四日連続で訪れていた竹中半兵衛が住む屋敷であつた、清則は思わず神に感謝する様に心中で踊り狂つた。

「もしや・・・あなた様は竹中半兵衛様で？」

清則が一応確認の為青年に問いかけた、青年はニコリと笑つて首を縦に振つた。

「如何にも・・・私が竹中半兵衛重治で御座います」

清則はこの言葉に一筋の光明を見いだした気がした・・・。

第十二話　竹中半兵衛重治　前編　（後書き）

さて前書きと異なって作者の本音を申し上げますと・・・。

誰でもいいから評価してください、貶しても良いですから・・・。

第十三話　竹中半兵衛重治　中編　（前書き）

PCにウイルスが入った為に投稿が遅れた事をここにお詫びします

第十三話　竹中半兵衛重治　中編

- 栗山 庵 門前 -

「き、貴殿が御高名な竹中半兵衛重治様・・・これは知らずとは言えご無礼を・・・」

須藤が慌ててその場に平伏して先までの非礼を詫びた、下手をすれば仕官どころの話では済まないと即座に判断したのである。

「そのような・・・御着物が汚れてしまいます、それに名乗りもしなかったこちらが悪いのです・・・どうかお気に召しますな」

逆に半兵衛の方が慌てて須藤の手を取って言った、半兵衛は自らの手で清則の袴の裾に付いた埃と泥をほろってやった。

「そ、某は木下籐吉郎様麾下の須藤清右衛門清則と申します！！なにとぞ半兵衛様のお力をお借りしたく！！」

清則が半兵衛の手を握りしめて何度も懇願した、半兵衛はその名を聞くとピクツと勘付いた、須藤清則と言えばかの本多忠勝と互角に渡り合い今川攻めで功を上げ今や織田家でも一、二を争う猛将であると悟った。

「須藤殿・・・まずは昼食になさいましょう、仕官の話はそれからと言う事で・・・」

半兵衛が須藤の手を引いて庵の中に入った、門の中では千里が啞然とした顔でこちらを見ていた、あれ程嫌がっていた織田家の人間を中に入れたのは利家以来の事であったのだ。

- 庵 大広間 -

清則は目の前に出された山菜や魚で彩られた膳をあつという間に平らげてしまった、いや正確には味など感じなかった、かの名参謀・竹中半兵衛とこうして食事が出来る事に箸を持つ手が震えてしまったのだ。

「父上様・・・安藤守就様がお越しになれましたが・・・」

千里がスツと襖を開けて半兵衛の叔父である安藤守就の来訪を告げた、清則は拙いと思い動揺して箸をコトリと落としてしまった、それに感付いた半兵衛がチラツと清則を見た。

「清則殿・・・貴殿は織田家の人間、斎藤家の人間と鉢合わせするのは気拙いでしょう・・・書斎でお待ち頂けますか？千里、案内してあげなさい」

半兵衛が静かに箸を置いて清則に退席を促した、清則は地獄に仏と言う感じで慌てて千里の後を付いて大広間から出て行った。

「須藤様と申しましたね？」

千里が初めて温厚に語りかけた、清則は驚いて千里の方を見た、いつもは半ば発狂したように叫ぶ千里が初めて女らしい口調に戻ったのである。

「は、はい・・・」

須藤が埃っぽい書斎の床にゆっくり腰掛けて返事をした、辺りを見渡せば孫子や春秋左氏伝などの政治書や兵法書が山積みになっていた。

「あ・・・いえ、どうぞごゆっくり・・・」

千里が含みのある言葉を残して部屋の戸をパタリと閉じて行った、変だなと思ったつきり清則は山積みになっている書物から『呉子』

なる兵法書を取り出して読みふけり始めた。

呉子が読み終わると孫子・戦国策・蔚僚子・三略と次々に本を取っ替え引っ替えに取り出しては水に濡れた大地みたいに貪欲に吸収して行つた。

そして三略を読み終えて司馬法へと手を伸ばそうとした時に辺りが暗くなり始めている事に気が付いた、しもつたと思ひ立ち上がり後ろを振り返ると既に半兵衛がそこに座つて御茶をのんびりと啜っていた。

「あ、あの・・・」

須藤が顔面蒼白になつて頭の中が真っ白になつた、こんなにも半兵衛を待たせた挙げ句自分は暢気に読書に耽つていた等どうも仕官の誘いにきた使者に有らざる行為に目の前が真っ白になつた。

「いえいえ、書物とは所詮は読んで貰つて初めて存在意義が有る物です・・・」

半兵衛がニコリと笑つて湯飲みをコトンと置いた、その言葉に救われたかの様に須藤はホッと溜息を付いて床に座つた。

「叔父上は大変現在の斎藤家の状況を憂いておいででした・・・家中では疑心暗鬼が支配し、軍は統率が取れずに略奪や脱走がまかり通りっております・・・挙げ句には民ですら税を納めず逃亡したり棄民になつて織田家へと逃げております」

半兵衛が困り切つた顔をしてポツリと愚痴をこぼした、現に安藤守就も既に斎藤家を見限り始めているとさえこぼした。

「国の不和・軍の不和・部隊の不和・戦鬪の不和ですな？」

須藤が即座に先ほどから吸収した知識を思い切つて半兵衛にぶつけ

てみた、半兵衛は左様と言わんばかりに頷いた。

「変わって織田家では賞罰を公正に行い軍紀を乱す者は例え功績があつても厳重に処罰されるとお聞きます」

半兵衛が湯飲みで茶を注いで須藤に手渡した、須藤はそれを受け取ると静かに啜り始めた。

「左様、かつて今川攻めに置いて功績を挙げた小姓が此度の墨俣攻めでは敵前逃亡をする始末でした・・・それを知った大殿は即座にその小姓をを御斬りになられました・・・」

須藤が先の墨俣の合戦で起こった出来事を話した、先の曳馬攻めで奇襲部隊を獅子奮迅の働きで撃退した勇猛な小姓がいて信長は小姓の身から足輕頭に抜擢して手元に置いたが・・・墨俣攻めの折りに十名もの兵の頭にありながら敵の猛反撃を受けるや否や兵を置き去りにして本陣に逃げ帰ってきたのだ。

それを知った信長は『例え十名の足輕と言っても兵を置き去りにして敵に背を向けて逃亡するとは何事か』と激怒してわざわざ本陣まで訪れ『清則を見よ！！かつて彼が足輕頭であつたときは犬千代（利家）を救うために鬼とも思える本多平八と対峙し互角に戦つたのだぞ！！』とその小姓を叱責した上で自ら軍令違反の罪でその小姓を斬り捨てたのである、この厳罰を恐れた兵達は誰一人として逃げ出さずに墨俣の地を枕に討ち死にしたのである。

「成る程・・・信長様は龍興様と違って聡明な御方でいらつしますな・・・」

半兵衛が腕を組んでウーンと唸つた、この時明らかに半兵衛は織田家に仕官すべきかどうか迷い始めていた・・・。

第十四話　竹中半兵衛重治　後編　（前書き）

PCにウィルスが入ってたせいかデータが全部パーになり投稿が遅れました。

いえ、決して言い訳ではありません・・・。

嘘です・・・言い訳です

第十四話　竹中半兵衛重治　後編

- 翌朝 庵 書斎 -

結局須藤と半兵衛は朝まで兵法や戦国時代を終わらせるには？などの討議を続けていた。

須藤はこの漢にいつの間にか惚れ込んでいた、この漢ならばきっと籾吉郎様や信長様を天下人にしてくれるはずだという絶対な自信を持ち始めていた。

また逆に半兵衛も須藤の柔軟性や理解力を評価しその無限大の可能性に興味を引かれていた、そしてそんな彼が心底尊敬している木下藤吉郎なる人物にも興味を抱き始めた。

半兵衛は須藤が帰った後も一人書斎に籠り考え続けていた、織田家につくかそれともこのまま素浪人のまま人生を終えるか・・・。

半兵衛は肺を病んでいて自分でもそう長くは生きられないであろうと感じていた、ならばこの命燃やし尽きる日が来るまで木下藤吉郎を主として戴き決して悔いの無い人生を送ろうと決心した。

「千里はおるか!!」

半兵衛が勢いよく襖を開け放ち庵中に響くような大声を上げた、まだ寝ぼけ眼であった千里もこの声に肝を冷やして直ぐに書斎に駆けつけた。

「ここに・・・」

千里が父の前に跪き返答した、千里は思わず声を上げて驚きそうになった須藤が訪れるまで暗く今にも死相が出そうな顔をした半兵衛の顔が何と生気に満ち溢れ目が輝いていたのだ。

「ここを払うぞ！！」

半兵衛が袖口に手をつ込みガハハと大声を上げて笑い始めた、千里にとってこんなに嬉しそうな父の顔を見るのは初めてであった、実は既にこの時半兵衛の頭の中では長年の隠遁生活で錆付いた脳がフルスピードで回転し始めていたのだ。

「え？・・・」

千里が思わず戸惑った、彼女にとってこの地は故郷同然でほかの土地に移り住むとは思いつかなかったのである。

「藤吉郎様の元へ参るぞ！！我が知略を欲する者のためにワシは行き続けねばならんわ！！これから忙しゅうなるわい！！」

半兵衛が薄ら笑いを浮かべて嬉しそうに答えた、半兵衛は織田家へ仕官を決めこの庵を出て広い世界で自分の頭脳をフル活用しようと悟ったのである。

- 墨俣城 大広間 -

半兵衛は須藤に連れられて信長に謁見するため織田軍の美濃攻略の要所・墨俣城を訪れた。

須藤は無事に仕事をやり遂げたと言わんばかりに藤吉郎に半兵衛の凄さを何度も繰り返して報告した。

藤吉郎に至っては『我が（漢の名軍師・張良）子房が来た』と三国志に置ける魏の曹操が名軍師・荀？が仕官しに来た故事に準えて最

大限の歓迎の言葉を述べた。

墨俣に到着して一時間もしない内に信長から大広間に来るように指示が与えられた。

「うぬが竹中半兵衛重治か？」

信長が上機嫌に聞いた、須藤不在の間に散々西美濃三人衆（安藤守就・氏家卜全・稲葉一鉄）に煮え湯を飲まされ続けていたのである。半兵衛が織田陣営に下ったとなれば美濃勢の将兵は動揺し疑心暗鬼が生まれて如何に堅牢な稲葉山城と言えども打ち砕くのは赤子の手を捻るようなものであったのだ。

さらには安藤守就を筆頭として西美濃三人衆の調略も容易いものになると踏んでいたのだ。

「はっ・・・竹中半兵衛重治にございます」

半兵衛が都の貴人から薫陶を受けた古今の教養を学んだ文化人の名に恥じぬような涼やかな態度で返事をした。

「うむ！！よい顔じゃ！！ワシに仕えよ！！」

信長が扇子を半兵衛に向けて自分に仕えるよう命令した、だがその言葉を聴いた瞬間半兵衛は即座に顔を曇らせた。

「恐れながら申し上げます・・・私は既に仕えるべき主を見つけております故、その儀はお断りさせていただきます」

半兵衛が信長からの誘いを丁重に辞退した、半兵衛は藤吉郎に仕えるのであつて信長に仕える訳では無いとはつきり豪語したのである。

「むう・・・どうしても猿めに仕えると申すのか？」

信長が少し機嫌を悪くして呟いた、その場に居合わせた家臣達もどこか青ざめた表情をしている藤吉郎に視線を向けていた。

「はい、例え百万石の高禄でと言われても私の決意は変わりませぬ・
・」

半兵衛が正面から信長と戦う姿勢をアリアリと見せ付けた、このやり取りをまじかで聞いている藤吉郎と須藤は冷や汗ものであった。

「ふっ・・・よかろう、猿の家臣は我が家臣も同様じゃ！！猿の元で励めい！！」

信長が諦めたのかそう叫ぶとゴロつと寝転がって天井を見上げた。

「ありがとうございます・・・ではこれで、即座に西美濃三人衆の調略の準備に取り掛かります」

半兵衛がスツと頭を下げると藤吉郎等と共に大広間を後にして行った。

この謁見の後に半兵衛を批判する者も少なくなく（滝川一益・佐々成政・柴田勝家等）即座に信長に対してあれこれと換言した。

「猿には勿体無い者がある・・・須藤清則の武に竹中半兵衛の知の二つじゃ」

信長がクスクスと笑って信玄が家康に対して『家康に過ぎたるは唐の頭に平八』と言ったように藤吉郎を高く評価した。

半兵衛参陣によって織田軍はもはや美濃での合戦で非常に優位に立つことが出来た。

ちなみに今回の美濃遠征に参戦している諸将は次の通りである。

織田軍文官衆（丹羽長秀・木下藤吉郎・佐久間信盛・林秀貞・森可成）

織田軍武官衆（柴田勝家・池田恒興・須藤清則・滝川一益・佐々成

政・前田利家)

そして木下軍団では軍師・竹中半兵衛を新たに迎え。

文官(木下小一郎・浅野長吉・竹中半兵衛)

武官(須藤清則・蜂須賀正勝・前田利家・太田牛一)

と織田家でも一、二を争うような面子が揃っていた・・・。

おまけにこの美濃攻めで新たに数名の知将・猛将が木下軍に馳せ参
じる事となるのである・・・。

第十四話　竹中半兵衛重治　後編　（後書き）

評価ありがとうございます！！まだまだ未熟者に毛が生えた程度ですがこれからも日々精進していきます！！

第十五話　稲葉山の出会い（前書き）

PC調子悪い・・・orz・・・。

BFも途中でブラックアウトする・・・。

第十五話　稲葉山の出会い

半兵衛が木下軍に仕官してから三日が過ぎた。

半兵衛の言葉は正に傾国の美に等しく叔父・安藤守就や稲葉一鉄・氏家卜全などの西美濃三人衆も織田家に内応し恭順する姿勢を見せていた。

他にも美濃の土豪にも木下軍の傘下に入るよう書状を休む間も無く書き続け、山内一豊・中村一氏・前野長康等の諸将が相次いで木下軍に下り即戦力となった。

打って変わって木下軍を影で支え続けていた浅野長吉・木下小一郎などの文官にとって台所整理や禄高調整に追われる日々となった。

そして半兵衛仕官から丁度一ヶ月が経過した時藤吉郎以下織田家重臣達に非常呼集が掛かった。

恐らく美濃攻めの事前会議であろうと誰もが予測できた、と言うのも留守役を続けていた織田信益・織田信成などの織田一門衆や三河の徳川援軍が続々と墨俣入りしていたのである。

この時織田軍は三万六千に対して斎藤方はわずか一万弱と言う圧倒的大差をつけておりその陣立てを見た各地の諸侯は『信長恐るべし』と口々につぶやいたと言う。

対する斎藤方は各地の支城を捨てて稲葉山城に籠城し徹底抗戦の姿勢を見せ続けていた。

だがそんな状況下でも斎藤家を見捨てずにただ忠義を尽くす者も少なくなかった、長井道利等の武将達である。

彼等は稲葉山城に立て籠もり日夜織田家の猛攻を防いでいた、だが長井道利以外にも斎藤家を支えていた名將がいた。

中条流剣術伝承者・富田勢源であった、あまり知られてないが彼は一時期斎藤家剣術指南役として使っていたが義龍死後野に下つていたのだ。

彼は剣術だけでなく兵法にも明るく、それを見初めた龍興に召し抱えられていたのだ、彼は籠城に先立ち病で盲目になりながらも完璧に等しい指揮で織田軍を翻弄していたのだ。

困った藤吉郎は須藤・竹中・蜂須賀等の股肱の家臣を率いて稲葉山を偵察し弱点を探していた。

「むう・・・これだけ弱点が無いとお・・・」

藤吉郎が困り果てた顔をしてブックサ文句を言いながら慎重に道を進み始めた、それもそのはずかれこれ三時間以上も稲葉山を這いずり回り時には歩哨の目を誤魔化しながら進んでいたのだ、疲労困憊もムリが無かった。

「そうですね・・・搦め手にも主力の一部を配備しているとは・・・富田勢源と言う人物もなかなかの策士ですね・・・」

半兵衛が珍しく顔を真っ青にして汗を拭きながらうめいた、さすがの半兵衛も富田勢源なる人物を認めた、それだけで藤吉郎に力攻めを決断させたのである。

「しかたあるまい・・・今日は引き上げるか・・・」
小六がヒイヒイ言いながら枝に掴まって弱音を吐いた、藤吉郎はこれ幸いとうなずいて半兵衛に会釈した。

が、空が紅に染まっても一向に山から出られる気配は無く・・・とうとう空は真っ暗になってしまったのである。

「あははは・・・迷いましたかね・・・どうしましょう？」

半兵衛が苦笑いを浮かべて先頭を歩いていた藤吉郎に声をかけた、藤吉郎の顔はもはや藍より真っ青になっていて一言も発せずにした。

「うう・・・腹が減った・・・藤吉郎殿お・・・わしゃ腹が空き過ぎて死にそうだ・・・」

小六が益々子供じみた弱音を吐いて不平不満を述べた、須藤はその弱音を止める為に懷からもしもの時の為に取っておいた兵糧米を小六にずっと差し出した。

「おや？お武家様・・・こんな時間にこつたらとこで何を？」

獵師の格好をした青年が突然茂みの奥から出てきた、一行にはこの者が助け神に見えた、だがここは敵地もしや敵かも知れぬと言う考えが頭をよぎった。

「いや面目ない・・・わしら織田家に仕える者なんじゃが・・・道に迷うてしまつてな、一晩でいいから泊めてくれぬか？」

他の者の不安を一切無視するかのように藤吉郎がアハハと笑いながら青年に声をかけた、それはいつも通りだが何故か殴りたい衝動に駆られた。

「ええ・・・いいですよ、山菜と猪で作った鍋物しかありませんが・・・それでよろしいのであれば・・・」

青年が撃ち殺した猪を見せて満面の笑みを浮かべた、その表情に敵意は全く無くむしろ仏のようであった。

これが後に豊臣三老の一人で「仏の茂助」の異名を取った・堀尾吉晴との出会いであった・・・。

第十五話　稲葉山の出会い（後書き）

最近youtubeなるサイトで笑える動画や面白い動画を見るのに填っています。

決してそのせいでUPが遅れた訳では無いのdry

第十六話 四面楚歌の危機・前編 (前書き)

本当に更新遅れてすみませんでした。

執筆活動を再開させていただきます。

第十六話　四面楚歌の危機・前編

- 山小屋 -

藤吉郎一行は青年の厚いもてなしを心から堪能し既にほろ酔い気分となっていた。

「ほお・・・貴殿は斎藤家にお仕えなされていた堀尾泰晴氏の御嫡男・堀尾茂助殿でしたか・・・」

半兵衛が頬を微妙に朱に染めて杯を傾けた、堀尾泰晴かつては斎藤家でも1、2を争う剣術の腕前の人物であった。

堀尾泰晴、彼は斎藤道三・斎藤義龍・斎藤龍興三代に仕えた剣術師範であったがある日刺客の襲撃を受けて死亡、父と違って剣術の才能も無くかと言って知略もお世辞にも無い茂助は城から追放されたのである。

「父上の名をご存じでしたか・・・」

茂助が鍋の中の野菜を器に運んで懐かしそうにポツリと言った、茂助が仕留めた猪の味は格別で陣中食よりうまかった。

一行は茂助が侍として召し抱えられたいと思っていた事を知り藤吉郎が率先して仕官するよう進めたが「やれねばならない事がある」と言っって首を縦に振らなかった。

茂助の好意により一晩だけ宿を借りることになった。

彼曰く「外は斉藤家の歩哨だらけです、明日の朝私が抜け道まで案内しますので、今日はお泊りください」とのことであった。

そしてすっかり夜も更け皆が床についた時、複数の殺気を感じた須藤は太刀を片手に飛び起きた。

「藤吉郎様・・・囲まれております」

須藤が隣で大いびきを掻いていた藤吉郎を揺すって無理矢理起こした、小六も殺気に気がついたのか太刀を持って小窓の隙間から外を覗いていた。

「人数は・・・ざっと二十数名つて所か・・・」

小六が太刀を抜いて小窓をピタリと閉じた、藤吉郎も須藤に起こされてようやく事態を察知した、半兵衛も護衛用の小太刀を抜いて息を潜めていた。

「事は荒立てなくないが・・・小六・清則・・・頼むぞ」

藤吉郎が太刀を握りしめて少しふるえて言った、藤吉郎は頭脳は一級品だが剣術の腕前は家中でも下から数えた方が早かった。

「はっ・・・小六、お主は裏から・・・俺は表から行く」

須藤がスラリと太刀を抜いて小六と意思疎通を図った、小六はコクンと頷くと足音を立てずに裏口へと回った。

「堀尾殿は？」

半兵衛がこの小屋の主がいなくなった布団をひっぺ返して須藤に聞いた。

「清則、氣い付けろ・・・堀尾殿の種子島がなくなってる」

藤吉郎が壁に立てかけてあった茂助の火縄銃がなくなっている事に気がついて清則に注意を促した。

「いるのは分かっておる！！出てまいれ！！」

外から斉藤家の足軽達の叫び声が聞こえてきた、清則はこの時茂助が斉藤家と内通し自分たちを暗殺しようと思論んでいたと思い込んでいた。

清則は戸口に耳をそばだてて敵の息遣いと足音で正確な人数を把握しようとしていた。

だが外は風が強く足音も息遣いも聞き取れなかった、だが把握しているだけでざつと二十数名と言ったところであつた。

（小六の読み通りだ・・・さて、どうするか・・・足軽はともかく火縄銃で狙われたら最後・・・か）

清則が刃を鏡にして外の足軽達の持つ得物を確認して考え込んだ、太刀・槍は確認できたが火縄銃がどこにあり、どこから狙っているか確認できなかった。

「三つ数える！！それまでに出てこなければ踏み込むぞ！！」
足軽の頭と思わしき男の怒鳴り声が闇夜に響き渡った。

（ええい！！考えても始まらぬ！！ままよ！！）

清則は考えることを辞めて勢い良く戸口を蹴り倒して外に飛び出した。

「な、なんだ貴様は！！」

足軽頭が驚いた顔で小屋から飛び出して来た清則をにらみつけた。

「我こそは織田家足軽大将・須藤清右衛門清則なり！！」

清則が太刀を構えて声を張り上げた、その瞬間風が止み雲の間から月光が差し込んだ・・・。

第十七話 富田勢源（前書き）

少しスランプ気味・・・。

第十七話　富田勢源

清則の太刀が月の光を浴び妖しく青白く光っていた。

「何っ！！彼奴め！！織田と手を結んでいたのか！！」

足輕達の頭が得物を構えて叫んだ、その部下達の数はおよそ24名と明らかに歩哨の域を越えていた。

「何の事が分からぬが・・・見られたからには死んでもらおうか！！」

清則が太刀を構えて叫び、敵の真っ只中に飛び込んだ。

一振りで二人の足輕の首を刎ね、返す刃で側面から襲い掛かろうとした者の槍の穂先を叩き折った。

そしてそのまま槍の柄をつかみ、自分の方向へ引き寄せるとすれ違いざまに腹を鎖帷子ごと切り裂いた。

・・・殺し。殺戮し。屠る。

その一連の動作は多くの戦場を越えてきた『いくさ人』の剣筋であった。

流派など無い、これは彼の自己流の剣術である、戦場を一つ二つと生き延び・・・。

・・・幾つもの血の大河と屍の山を越えて出来た一種の洗練された美術品であった。

やがて彼の周りに動くものがいなくなった時、始めて清則は太刀を降ろした。

「こつちはあらかた片付いたぜ、清則の旦那・・・だ、旦那？」
小六が思わず言葉を失い息を飲み、震えた。

そこには紅月の光に照らされた紅い鬼が返り血で紅に染まった太刀を携え、紅い血の大河の真ん中で立ち尽くしていたのだ。

「小六か・・・」

清則が太刀に付いた血を振り払って鞘に収めた。

「あ、ああ・・・にしてもすげえな旦那・・・」

小六が首を飛ばされた屍をひよいと避けて呟いた、その切り口は鮮やかで恐らく痛みすら感じずに死んだのだろう。

「別に・・・それより殿と半兵衛殿は？」

清則がスツと血で塗れた手で髪を掻き揚げて聞いた、その目は未だ死闘の興奮の色が残っていた。

だが突然二人とも何かの気配を感じて思わずそこから飛びのいた、先ほどまで二人が立っていた所に棒手裏剣が突き刺さっていた。

「ほお・・・勘が良いのお・・・さしずめ野生の勘と言う物かの？」
林の奥から不気味な老人が杖を付いて静かに歩み寄ってきた。

その身のこなしに物腰、とても常人とは思えなかった。

「爺さん・・・何者だ、あんた・・・」

小六が太刀の柄に手をかけて老人を睨み付けた。

「小六、下がってる・・・この爺さん、只者じゃない・・・」

清則が老人を殺気を込めた目で睨み付けて小六を制止した。

「ほお・・・そういうお前は何者だ？山犬や狼みたいに血の匂いをさせて」

老人がクックククと笑みを浮かべて言った、その声は地の底から聞こえるほど低く感じられた。

「何が言いたい・・・」

清則が太刀の柄を握り締めていつでも斬りかけられるような体勢に入った。

「お前の剣は畜生並だと言っておる・・・」

老人がニヤリと笑って清則を卑下した、その言葉で清則の中の何かが切れた。

「ほざけ！！ジジイ！！」

清則が勢いよく太刀を抜き払った、おおよそ常人の目には止まらぬほどの速さで・・・。

ギン！！

だがその老人は持っていた杖でそれを難なく止めて更に邪惡な笑みを浮かべた。

「見当違いだったな、犬畜生以下の獣の剣だなコレは・・・」

老人が杖をクイっと上に払って刃を受け流した、そしてそのまま肘と杖の先端で刃を挟み込み・・・一気に叩き折った。

そして杖で清則のわき腹を思いっきりたたき付けた。

「ガッ・・・はっ・・・」

清則は思わず膝を地面に突いてしまった、肺から息が流れ出し胃液が逆流し始めたのだ。

「だ、旦那！！何者だてめえ！！」

小六が清則を守るように立ちはだかった、老人はフォツホホと笑い始めた。

「おお、忘れておったわい・・・ワシは中条流伝承者・・・富田勢源と申す」

勢源が深々と礼儀正しく二人に挨拶した、そしてその老人は『さて、止めをさそうか』と呟いて杖をギュツと握り締めた。

パーン！！

静かな山に一発の銃声が鳴り響いた、その魔弾は勢源を確実に狙つての物であつた。

だが勢源は素早く身を一步退けて難なくそれを回避した。

「ほ、堀尾殿！！」

林の影から突然茂助が飛び出してきた、その手には一丁の種子島が握られていた。

「ふむ・・・堀尾の一人息子か・・・臆病者がよく出てきた、その威勢だけは褒めてやろう」

勢源がその見えない目で確実に茂助を睨み付けて言った。

だがその二人の間に別の人間の気配を悟ったのか同じ方向をにらみつけた。

「勢源・・・その辺にしておけ、楽しみは後にとっておけ」
そこに立っていた男こそ、斎藤家現当主・斎藤龍興であつた・・・。

第十八話 四面楚歌の危機・後編 (前書き)

前の話は幕間つてことになってくださいw

第十八話　四面楚歌の危機・後編

斎藤龍興、父は土岐氏の流れを組む猛将・斎藤義龍、そして祖父は戦国の梟雄にして信長の義父でもある・斎藤道三。

史実において彼の前半生は竹中半兵衛によつて僅か十数名の兵で稲葉山城を奪われたり、安藤守就・稲葉一鉄・氏家卜全の西美濃三人衆に裏切られたりと散々な目にあつてきた。

だが後半生は祖父・斎藤道三に見劣りしない程の知恵者ぶりを見せた、足利義昭を擁立して本願寺・浅井・朝倉・武田・毛利と言つた強大な大名に対して反信長同盟を結成し日本を一個の戦場に見立てた戦略を立てた程であつた。

「斎藤・・・龍興・・・」

茂助が思わず息を飲んだ、彼はかつて幼い頃に斎藤家の始祖・斎藤道三と面会したことがあつた。

その時の威圧感、相手に畏怖の念を抱かさせる目付き・・・その全てが似ていた。

かつて酒色に溺れ『戦国の暗君』と言われていた男ではなかつた。

「堀尾茂助・・・否、堀尾吉晴か」

龍興がまるで虫けらを見るかのように冷たい目で茂助をチラリと見て、すぐに顔を背けた。

後にその場に居合わせた小六はこう語る『信長公に初めてお会いしたとき、魔王と呼ばれる所以が分かつた・・・されど龍興公には遥

かに及ばなかった』と。

「龍興様、こやつ等の始末は私めが・・・」

富田が杖の柄に手を掛けてソレを一気に引き抜いた、杖は仕込み杖であつたのだ。

「ふむ・・・興味が沸いた、そやつらは生かしておけ」

龍興が地面に蹲つて清則をチラリと見て背を向けた。

「はっ？で、ですが・・・こやつ等を生かしたままでは計画が・・・」

富田がオロオロと龍興に進言した、だが龍興は振り返らなかった。

「良い、虫けらを幾つ踏み潰そうとも・・・天の高みには届きはしまい」

龍興がクツクツと笑いながらそのまま歩きだした。

「・・・御意・・・清則、信長に伝えよ『我等は城を捨てる、拾うなり焼き払うなり好きにしろ』とな」

富田が複雑な顔をして吐き捨てるように呟いて立ち去った。

「はぁ・・・ったく・・・生きた心地がしなかったぜ・・・」

小六が二人が立ち去った後にその場に腰を抜かしたように座り込んだ。

「畜生・・・畜生・・・」

清則が両手で土を掴み、その拳で何度も地面を叩きつけた。

「清則殿・・・命が助かっただけ良かったではありませぬか」

茂助が肩を貸そうと清則に歩み寄ったが、清則は手を振り回してそ

れを拒絶した。

「何が戦国一じゃ・・・たかが老人1人に膝を突かされ土に塗れるとは・・・なんたる屈辱じゃああ!!」

清則が顔を上げ月に向かって咆哮した、その叫びはまさに孤狼が月に向かって吠えてるようなものであった。

「旦那・・・」

小六が思わず異様な光景に言葉を無くしていた。

「かくなる上はこの腹割いて死ぬまでじゃ!!」

清則が脇差を抜いて結い上げた髪を振りほどいて叫んだ。

「き、清則殿!!（だ、旦那!!）」

茂助と小六が慌てて清則の腕を押さえつけて脇差を取り上げようとした。

「ええい!!放せ!!放せい!!」

清則がガアアアと吠えて二人を振りほどこうとした、その時突如拳が清則の頬を打った。

「と、藤吉郎・・・」

小六が怒りの表情を浮かべて拳を握り締めてる藤吉郎を見上げた。

「藤吉郎様・・・」

清則が頬を押さえて驚いた表情で藤吉郎を見た、生まれて初めて本気で殴られたのだ。

「こんのたわけ者が!!死んで何になる!!悔しかったらがむしやらに生きて強くなりやええじゃろ!!死ぬなんざな、ただの逃げじ

「や！！お前は武士^{もののふ}じゃろうが！！戦わずして逃げるのがお前の生き様か！？」

藤吉郎が清則の襟首を掴んで一気にまくし立てた、その言葉に清則は涙を流して地面に蹲った……。

その頃、闇に包まれた山の中を疾走する二人の騎馬武者の姿があった。

斎藤龍興と富田勢源の二人であつた……。

「勢源、腕の傷は痛むのか？」

龍興が馬を飛ばしながら後ろをピタリと離れずに疾走する勢源に話しかけた。

「はっ……」

勢源が血が流れる腕を抑えてながら呻くように呟いた、最初に清則に切り付けられた時に彼の太刀を捌ききれなかったのだ。

「それと、その杖は捨てろ……使い物にならん」

龍興が小枝を避けながらかすかに呟いた、その意図を汲み取れず勢源がスツと杖を抜いて触つて調べて見ると、刀身に亀裂が入っていたのだ。

「最初に捌いた時……ですかね？」

勢源が杖をポイツと崖の下に向かって放り投げて聞いた。

「さあ？だが……あの須藤清則とか言う男、もしかすると我が策を成就させる最大の障害やもしれぬな」

龍興が楽しそうに笑いながら言った、この男は幾つもの修羅場を潜り抜けてきた、故に既に精神に異常をきたしていた……。

四面楚歌の危機は去った、だが清則にとっての戦国疾走はこれから始まったばかりである。

第十九話　別れ（前書き）

いきなりの急展開ですが、そこはご愛嬌って事で目を瞑ってください。

第十九話　別れ

清則一行は新たに堀尾茂助を配下に加えて稲葉山を後にし、陣所に帰還した。

そして藤吉郎はありのままを信長に報告した、富田勢源に清則が敗北した事・斎藤龍興が稲葉山城を捨てて逃亡した事の二つを、仔細ありのまま報告した。

「猿、ご苦労であつた・・・下がってよいぞ」

信長がその報告を知っていたと言わんばかりの表情をして呟いた。

「はっ・・・これより稲葉山総攻撃にかかります」

藤吉郎が疲れを見せないように立ち上がって陣所を後にした。

今、陣所には須藤清則と織田信長の二人だけであつた。

どちらも口を開かず黙したまま一言も語らなかつた。

「清則・・・よくぞ生きて戻つた」

最初に言葉を発したのは信長であつた、そしてそのまま立ち上がる清則の前に腰をすえた。

「大殿・・・面目次第もございません・・・」

清則が深々と頭を下げて詫びた、詫びる相手は信長と織田家そのものであつた。

「清則、クヨクヨするでない・・・『敗北を知らない者に勝利は無い』と言う、そもそも戦いの勝敗は兵家の常じゃ」

信長がポンポンと清則の肩を叩いて励ました。名門今川家を滅ぼし、そして今斎藤家を滅ぼし天下に飛翔しようとする信長らしからぬ言葉であつた。

「は、はあ・・・」

清則がどこか腑に落ちない顔をして相槌を打った。

「ふむ・・・数ヶ月前まではただの足輕だった主が今や織田家一の猛将・・・数奇な運命とは思わないか？」

信長が腕を組んで昔を思い語り始めた。

確かにこの数ヶ月で清則の人生はがらりと変わった。

本多忠勝との一騎打ちで名を轟かし、三河衆と共に今川家を滅ぼし『織田家に須藤清則あり』とまで言われるほどにまで成長していた。

「そう言われるとそうですね・・・まことに数奇な運命でございませう」

清則が考え込むような顔をして呟いた。

この時代の足輕など斬られ・撃たれ・突かれ・踏み潰されて散り行く存在であつた。

その足輕が今や織田家の重臣となっていたのだ。

「ワシは天下を取る以外にもう一つ夢がある・・・清則、お主がどこまで成長するか見届けてみたいのだ・・・」

信長が戦国大名としての夢と戦国武将としての夢を語った。

その目は我が子の成長を見届けたいと願う父親の目であつた。

「わ、ワシがですか・・・？」

清則は呆気に取りられてポカンと口を開けていた。

「うむ・・・お主とは一度でいいから戦場で思いつきり戦ってみた
い」

信長が真面目な顔で清則の目を見つめて、己の望みを明らかにした。

「・・・」

主たる信長の率直な言葉に清則は困惑した。

「だが、今じゃ満足に戦えぬ・・・清則、今日限りで主を織田家家
臣の任を解く」

信長が思い切ったことを口にした。斎藤家を滅ぼした後各地で戦わ
なければならぬのに織田家一の猛将を解雇すると言ったのだ。

「え？・・・」

清則が愕然とした表情で返事をした。

「日本は広い・・・そして各地で名だたる大名どもがしのぎを削つ
ておる、それを検分し、より強くなって戻ってまいれ！！」

信長はそう言い放つと立ち上がり稲葉山攻めの指揮を執る為に陣所
を後にした。

清則はその足で藤吉郎に信長から伝えられたことをありのまま報告
した。

「そうか・・・信長様がそのようなことを・・・いかにワシと言え
ども殿の命令には逆らえまい・・・清則、いままでご苦労であった」
藤吉郎は悲しそうな表情を浮かべて清則の肩を軽く叩いてすれ違ふ

ように立ち去った。

かくして主従関係は終わりを告げ、清則の新たな日々が始まろうとしていた・・・。

第二十話　旅立ちと仲間（前書き）

すんごく疲れましたw
評価待ってますw

第二十話　旅立ちと仲間

稲葉山陥落の三日後、清則は尾張と三河の国境に立っていた。

清則を見送る為に木下藤吉郎・竹中半兵衛・前田利家・浅野長吉（改名して浅野長政）の四人とその他が見送りに来ていた。

「殿、今までお世話になりました・・・」

清則が深々と頭を下げて礼を述べた、せめてもの餞別として結構の額の路銀を渡されていた。

「うむ・・・お主も元気だな」

藤吉郎が涙を堪えるように瞬きをしながら呟いた。

「お主と肩を並べて戦えた事・・・俺は終生忘れないぞ！」
利家が清則の肩をがっしりと掴んで揺さぶりながら叫んだ。

「清則殿、お元気で・・・これは三河に着いた時に読みなされ」
半兵衛が清則の手を握り、その手に文を握らせた。

「皆様・・・達者で・・・」

清則が槍を片手にもう一度頭を下げて振り返らずに三河へと入っていった。

「これで・・・よろしいのですか？」

長政がぼそりと呟いた、藤吉郎の心中を察して口を開いて言った。

「奴はワシの配下で終わらせるには勿体無さ過ぎる・・・これでいいのだよ」

藤吉郎が涙を堪えながら段々遠ざかる清則の背を見送りながら呟いた。

しばし歩き続け、日が傾き始めた頃に清則は三河は岡崎に入った。

そこで思い出したかのように半兵衛から手渡された文を開き始めた。

『清則殿へ、貴殿がこれを見る頃は三河に入っているはず・・・岡崎のはずれにある荒寺に貴方を待っている者達があります』

とだけ記されていた。

「ワシを待っている者・・・はて？」

清則が文を懐に入れて首を傾げながら人づてに聞いた荒寺の方角へと足を向けた。

その荒寺に着いた時には既に日が沈みあたりが闇に包まれた頃であった。

如何にも盗賊が住んでそうな古ぼけた荒寺はひっそりと静まり返り、物の怪が出てきそうな不気味さであった。

清則は「よし・・・」と呟くと荒寺のお堂の戸を勢いよく開けた。

「お、お主らは・・・」

清則は中に入って思わず驚きのあまり槍を落としてしまった。

「元織田家家臣・木下小一郎！！清則殿に着いて行き申す！！」
藤吉郎の弟にして織田家家臣の木下小一郎が柱にもたれ掛かって叫んだ。

「同じく元織田家家臣・前田慶次郎利益！！俺も連れて行ってくれ！！」

前田利家の兄・前田利久の子（一説には滝川益氏の子とも）にして史実では秀吉・家康に恐れられた古今無双の猛将・前田慶次であった、ちなみにこの時まだ12歳である。

「元小寺家家臣・黒田官兵衛孝高！！師・竹中半兵衛殿の薦めによつてご同行いたします！！」

史実では小寺家家臣にして豊臣家臣、そして秀吉に「ワシ以外に天下を取れる男」と恐れられた謀将・黒田官兵衛である。

「お主等・・・このうつけどもめ・・・よく来てくれた！」

清則が苦笑いを浮かべた後、満面の笑みを浮かべて三人の肩を抱いた。

「俺たちだけではござりませんか？」

慶次がニヤニヤと笑いながら柱の陰を指差した。

そこには旅装束に身を固めた女性が頬を微かに赤く染めながらモジモジしながら立っていた。

「千里殿・・・」

清則が呆けに取られたような顔をして千里を見た、初めて会ったときあれだけ拒絶されたのでその驚きは計り知れなかった。

「あ、あの・・・父から文を預かっております」

千里が慌てた手つきで半兵衛からの書状を清則に手渡した。

そこには『千里は貴殿を慕っておる様子、どうかお頼み申します』

とだけ記されていた。

「おやおやおや？清則殿？顔が赤いですぞ？」

慶次がまだニヤニヤした笑みのまま清則の背中を肘で突付いた。

「あ、あのー！ふつつか者ですが・・・」

とゴニョゴニョと語尾を濁しながら千里が呟いた。

「え？あの・・・えつと・・・こちらこそ」

清則が困ったといわんばかりに鼻の頭を掻きながら挙動不審者のように目を泳がせながら呟いた。

「もそつと寄れ寄れい！！恥ずかしがらずにもそつと・・・あ痛っ！！」

慶次が冷やかすように二人をくつつけようとした所に小一郎のゲンコツが慶次の脳天を打った。

「この石頭め・・・慶次、そう冷やかすなよ・・・清則殿も困っておられるではないか」

小一郎が痛みでしびれる手をヒラヒラと揺らしながら慶次を叱りつけた。

「小一兄いは冗談が分かってないな・・・官兵衛殿も何か言ってやってくれよお」

慶次が頭を押さえて官兵衛に意見を求めた。

「それで、清則殿・・・これからいずこに向かわれるのです？」
官兵衛があっさり無視して清則に問いかけた、とりあえず三河に入ったからには何処へ向かわなければならなかったのだ。

「無視？酷くない？」

慶次がブーブーと不満を言いながら、その場に座り始めた。

「いや、特に決めてはいないが・・・」

清則が暖炉に枝をくべながら呟いた。正直これからどうしようかなんてまったく考えていなかったのである。

「なれば甲斐へと向かいましょう・・・長篠から北へと向かったところですよ」

小一郎が懷から地図を取り出して清則に説明を始めた、甲斐と三河はちょうど隣国に当たるとのことだ。

「甲斐といえば・・・かの武田信玄公の領国ですな？いいですね、私も信玄公の軍略を見てみたいですな」

官兵衛がフムと頷いて小一郎の意見に同調した、甲斐の武田信玄と言えは知らぬものがない戦国きつての名将で、その用兵は戦国一と呼ばれるほどであった。

「ふむ、では明日にでも甲斐に向かうとしようか・・・」

清則が地図を見ながら呟いた。清則も一度武田信玄を見てみたいと思っていたのだ。

「では、今日はもう休むとしますか？」

小一郎が莫座もくらを敷きながら聞いた。

「そうだな・・・」

清則も暖炉の傍で横になって静かに目を閉じた・・・。

（甲斐・・・か）

と清則は眠りに落ちる寸前に静かに呟いた。

織田家を放逐された清則、だがその人徳を慕って4人の仲間を得た。
そして甲斐の武田信玄との出会いで清則は何を学ぶのか、それはまた後の話である・・・。

第二十一話　徳川家の台頭　（前書き）

色々あつて更新が半年以上遅れたことを深くお詫びします。

第二十一話　徳川家の台頭

清則一行は長篠へと向かう道中、思わぬ人物と出会った。曳馬城、改め浜松城へと居城を移そうとしていた松平元康の行列であつた。

隠密も同然の清則達は行列の邪魔にならぬように道の端に伏して領民達と同じように平伏していた。

「あれが徳川家康公・・・」

官兵衛がちらりと目の前を通る輿を見て呟いた。元康は今川家から完全に独立しその旧領を完全に平定、今や東海一の大名に成り上がつていたのだ。と同時に松平元康は徳川家康と改名し東海の覇者として名乗りを上げていたのである。

丁度一行の前を輿が通り過ぎた時、突然１人の騎馬武者が一行の前で足を止めた。

「む？貴殿・・・もしや、須藤清則殿では？」

懐かしい声に思わず清則は顔を上げた。威風堂々とした斑模様の馬に跨った男。

脇に抱えた大槍、そして幾度も戦場で見た鹿角脇立兜・・・誰であろう本多忠勝その人であつた。

「本多・・・忠勝殿？」

清則が思わず呟くと同時に忠勝は馬から降りて清則に歩み寄った。

徳川家において須藤清則とは今川家を滅ぼすのを協力してくれた恩師同然だったのである。

「如何した、平八郎？」

そこにもう1人見知った顔が現れた、松平元康改め徳川家康である。目深に笠を被っていたが彼自身から放つ戦国大名としての威風が隠し切れていなかった。

もちろん、一同はこれに驚いた。先ほど輿が目の前を通り過ぎたばかりだったのに、輿に乗っていたはずの家康が目の前に現れたのである。

「と、殿！！何のための影武者ですか！！」

忠勝が馬上の家康を守るように立ちはだかつて諫言した。忠勝の言から察するに先ほど輿に乗っていたのは家康の影武者と言うことである。

家康は祖父である松平清康を始めに父・広忠をも暗殺で失っているので、刺客対策として影武者を用いていたのである。

無論、これは徳川家だけで無く各地の諸大名も影武者を立てることが多かった。

余談ではあるが、桶狭間の前に敦盛を舞った信長公は実は影武者との説がある。

これも余談だが『徳川に徒なす刀』と知られる村正は清康・広忠が暗殺されるのに用いられたとされ、更には嫡男・信康を介錯したと

伝えられるからである。しかし、本多忠勝の愛槍である蜻蛉切もまた村正の作でもある。

「おお。貴公は須藤清則ではないか!!」

家康が馬から降り、忠勝を押し退けるようにして清則の手を取った。途端にあちこちからざわめきが起きたのも無理はなかった。

「家康様も相変わらずお元気そうで何よりです。」

清則が家康に深々と頭を下げた。家康はそんな堅苦しい挨拶は要らぬと言って清則を立たせた。

「おや。貴公は確か木下殿の・・・」

家康が清則の側に控えていた小一郎に気がついて声をかけた。この時点で家康はある事に気がついていた。

事実上織田家の重臣とも言える須藤清則。

そして織田家家老の木下籐吉郎の弟・木下小一郎。

籐吉郎の軍師である竹中重治の娘・竹中千里。

前田利家の義理の甥である前田慶次。

小寺家家老で織田家への使者としてやってきた・黒田官兵衛。

この5人が美濃から三河へやってくると言うことは何か重大な仕事を請け負っているに違いないと確信していた。

「殿、如何致しました？」

徳川家康の股肱の家臣の1人であり、家康を知の部分で支えた本多正信が家康に歩み寄って伺いを立てた。

家康は現在浜松への移転の途上にあり、ここで時間を無駄に浪費すべき場合ではなかったのだ。

「弥八郎（正信の別名）と平八郎、この者達の用件を聞いておけ。」

家康は正信と忠勝にそう命じると颯爽と馬に乗り、行列へと戻って行った。

「ははあっ!!」

二人が頭を下げると五人を連れて近くにある庄屋の屋敷へと向かった……。

第二十二話　戦友

まだ日が昇っている途中と言うのに屋敷の中は暗かった。

雨戸を閉め切り、明かりと言えば部屋の真ん中には蠟燭が一本置かれていただけである。

それもそのはず、この家の主人が徳川家と織田家（元だが）の名将達が会談するのに盗み聞きされては拙いと気を利かせてくれたのだ。

「さて・・・織田家の用件を聞かせていただきましょうか」

蠟燭の明かりに照らされ、幽霊のように青白い顔をした正信が口を開いた。

「実は・・・」

清則はそう切り出すと全てを伝えた。織田家を放逐され諸国を回ると言うことをも伝えた。

忠勝は腕を組み『あゝ』とか『うゝ』とも呻いていた。だが一方の正信は静かに目をつむっていた。

「それで、清則殿・・・これからどちらに？」

正信が目を開いて静かに聞いた。その顔は相変わらず青白く、おそらく夜道で出会ったら逃げ出してしまうような顔をしていた。

「甲斐へ行こうかと・・・」

清則が地図を出して甲斐への通行路を説明した。岡崎へ長篠を抜け、信濃を経由して甲府へと向かうつもりであった。

「甲斐と言えば・・・あの信玄坊主の所とな？」

忠勝が言葉にうつすらながらも敵意を交えて聞いた。

それもそのはず。前年に徳川武田間で結ばれた大井川同盟を武田側が一方的に破棄し徳川領の遠江に侵攻してきたのだ。

大井川同盟とは徳川武田間で旧今川領の分割統治に関する同盟である。大井川から西は徳川が、東は武田が統治するとの約定である。

しかし、領土拡大欲に燃える信玄はこの約定を破棄し遠江に兵を進めてきたのである。

「信玄公の元で兵法を学ぼうと思ってましてな・・・」

清則がそう言うのと忠勝はこれ以上咎めることは出来ないと言う顔をした。

「そうか・・・」

忠勝はそう言うのと懷から銀がぎっしりと詰まった袋を取り出し、清則に差し出した。

「これは？」

小一郎が代わりに袋を受け取って聞いた。いわゆる路銀である。

「甲斐までは何かと物入りであろう。少ないが餞別として受け取ってくれい」

忠勝が破鐘のように笑いながら言った。だが忠勝の心境は複雑だった。

本当は友と馬を並べて戦いたかったが、これも戦国の世。友、親子、兄弟が敵味方に分かれて戦うのもまた一興だと納得せざるを得なかった。

「忠勝殿・・・」

長篠へと至る分かれ道まで見送りに来てくれた忠勝達を振り返って清則は呟いた。

忠勝はその視線に気がついたのか清則に向けて手を小さく振った。

「（また会おう・・・戦友^{とも}よ）」

忠勝は手を振りながら段々と小さくなって行く戦友^{とも}の背中を見送った。

第二部甲斐の虎編へと続く・・・。

第二部第一話 甲斐の虎

甲斐の虎こと武田晴信。またの名を武田徳栄軒信玄。

朝廷より従四位下大膳大夫を与えられ、信濃守の称を得る。また室町幕府より甲斐守護職と信濃守護職を与えられた。

戦国最強と誉れ高い精鋭騎馬隊である『赤備え』を有し、甲州金山を始め多くの金山を統治するまさに戦国の雄である。

だが、そんな彼にも常について回る忌まわしい過去があった。

――『武田の不忠息子』。

事の発端は天文十年（1541年）に起こった武田家の内紛である。

当時20歳だった信玄が宿老であり有力国人領主の板垣信方や甘利虎泰、飯富虎昌等に擁立され、父に反旗を翻したのである。

娘婿でもある今川義元を訪れに向かった隙を突いて信玄は甲斐と駿河間の街道を封鎖し、信虎を甲斐より追放したのである。

それ以降、信玄には『甲斐の虎』以外に『武田の不忠息子』と言う忌まわしい影名で呼ばれることがあった。

しかし、信玄はその過去を払拭するが如く天下統一事業を急いだ。

それから12年後に隣国信濃を平定し（北信濃を除く）朝廷から信

濃守護職を拝命し信濃領有の正当性を訴えた。

甲斐・信濃を平定し順調に見えた信玄の天下統一事業の前に思わぬ人物が立ちはだかった。

信玄にとって生涯の宿敵であり、越後の龍こと長尾景虎である。

第一次～第五次と五度に渡り川中島で長尾軍と雌雄を決する決戦を行ったが決着は付かなかった。

長尾軍との戦いで武田軍の天下統一事業は大幅に停滞し、越後侵攻を諦め駿河へと目を向け始めていた……。

甲斐 甲府 躑躅ヶ崎館

夜明けより数刻前、信玄はふとした物音で目が覚めた。

「何者か？」

信玄がうつすらと目を開けて聞いた。すると天井から音もなく一人の屈強な体つきをした男が降りてきた。

信玄は懷に隠し持っていた懷剣に手をかけたが、男の顔を見るとその手を柄から離した。

「守清か……。何時からお主はワシに夜明けを告げる役目を仰せつかったのかのう？」

信玄が冗談めかしながら目の前に跪く透破に声をかけた。だが目の

前の透破はその冗談をも軽く受け流した。

この男、戸石城主真田左衛門尉信綱の家臣であり甲州透破の支配者でもある。名を出浦守清と言う生まれつきの忍びである。

「奴らの消息が掴めました・・・」

守清がそう言うと言信玄の目つきがスツと代わり、先ほどまでの好々爺みtainな顔が一片して真剣な顔つきになった。

「・・・予想より早かったな。それで、奴らは何処へ？」

信玄が布団から起き上がって居住まいを正した。その顔には謀略と殺戮の中を生き延びてきたいくさ人の威厳があつた。

「奴らは長篠を抜け、戸石へと向かっております・・・」

守清が地図を取り出して信玄に説明した。信玄はその答えを聞くとニヤツと不敵な笑みを浮かべた。

「ほう。戸石・・・か」

信玄がパシンと膝を叩いてまたもや不敵な笑みを浮かべた。

戸石と言えば守清の上司でもある真田信綱の本拠であり、武田の領国でもある。

「・・・信綱様には何とお伝えすれば？」

守清がそう伺いを立てると信玄は文机の前に座り、墨を擦り始めた。

信玄は筆を手にとると何人かの人名を紙に書いた。

須藤清則。

黒田官兵衛考高。

木下小一郎。

前田慶次郎利益。

竹中千里。

以上五名の名が連ねてある書状を守清に手渡した。

「奴らを捕らえろ・・・決して殺すでないぞ」

信玄はそう言い終えると再び布団に潜り込み目を閉じた。守清はその書状を大事そうに懷にしまつと再び夜明け前を告げる瑠璃色な外へと飛び出して行った。

「（まさか奴らからこちらに出向くとはな・・・ワシにも天運が向いてきたと言うことか・・・）」

信玄は微睡みの中に落ちていきながらそう思い、笑みを浮かべ眠りについた。

甲斐の虎と須藤、二人の出会いが一步步近づきつつあった・・・。

第二話　真田一族

小県郡。かつては信濃の豪族の一人である真田氏の所領であったが、村上氏にその地を追われたのである。

そして北信濃の雄である村上義清が彼の地に大改築の末に堅城・戸石城を築いたのである。

後に義清は戸石崩れにおいて信玄に手痛い打撃を与えることに成功する、しかし武田に身を寄せていた真田幸隆の謀略により彼の地より追われることになる。

その功績により幸隆は戸石城主を拝命し、子の真田昌幸が上田に城を築くまでの間真田氏の拠点となったのである。

戸石城　中庭

夜明けと同時に各々の仕事を始める家臣達。ある者は城主を起こしに、ある者は掃除を始めたりと城内は活気に満ちていた。

だが。今日はいつもとどこか空気が違うなと真田幸隆は肌で感じていた。

嫡男の信綱に家督を譲ったにも関わらず幸隆は書斎で日々書物を読みあさり、解釈をつけると言った悠々自適な生活を送っていた。

「これ。何かあったのか？」

幸隆は目の前を通り過ぎようとした兵に声をかけた。どこからどう見ても戦に赴く兵のように鎧を纏っていたのだ。

「これは幸隆様。甲府の御館様より御命令がありまして・・・」

兵が幸隆の前に跪いて報告した。この時戸石城は北信濃、特に長尾家に対する備えとして置かれていたのだ。

「晴信様から御命令が？それで何処を攻めるのじゃ？」

幸隆が不審に思いつつも主命と言うことで聞いてみた。兵は呆氣にとられたような顔をして首を傾げていた。

「いえ・・・その。人捜しとのこと・・・」

兵がそう報告すると幸隆は頭を抱えてため息をついた。そして武一辺倒な自分の息子に少し呆れていた。

「やれやれじゃ・・・。信綱と昌輝、それと昌幸を呼べ。」

幸隆はそう言うのと障子を閉めて再び書へと向き直った。

それからすぐに長男・信綱、次男・昌輝、三男・昌幸が幸隆の部屋を訪れた。

信綱と昌輝は鎧装束姿だったが、逆に昌幸は普段着のままであった。

「お呼びと聞いて参上しました。」

信綱が兄弟を代表して幸隆に言った。幸隆は読みかけの本を閉じる

と三人に向き直った。

「信綱。御館様の御命令は人捜しと聞いたが？」

幸隆が確認するように信綱に聞いた。信綱と昌輝は何を今更と言った感じに目配せすると二人同時に頷いた。

「如何にも。御館様より浪人捕縛の令が出ておりますが・・・」

信綱がそう言うのと幸隆はこめかみに手を当ててため息をついた。

「阿呆共め……。そのように武装してはその浪人も警戒して逃げるじゃろつが・・・」

幸隆が諭すようにそう言うのと信綱と昌輝はばつが悪そうに苦笑いを浮かべて鎧を解き始めた。

「父上。私に一計が・・・」

三男・昌幸が一步前に出て幸隆に進言した。真田昌幸、名将・真田信繁（幸村）の父であり秀吉・家康を何度も苦しめた知謀の士である。

「昌幸か……。申してみよ」

幸隆が関心を持ったかのように言った。幸隆は自分に近い才能を持つ昌幸を信頼しており、知略もやがては自分を追い越すだろうと思っていた。

「はい、ここは力によって捕縛するのではなく……。徳を持って

彼の者を迎えるのが上策かと・・・」

昌幸の言葉に幸隆は思わず唸っていた。自分の予想した遙か上の模範解答が飛び出してきたからである。

昌幸が言うには夜盗や野武士に扮した透破達に一行を襲わせ、そこを自分達が助ければ彼らの警戒は薄れるだろうと説明した。

幸隆は昌幸の進言を聞き入れ、守清率いる甲州忍軍二十名ほどを昌幸に与えた・・・。

第三話　上田原の風

信濃　上州街道　上田原

上田原。武田家にとって苦い思い出がある古戦場の一つである。

天文17年（1548年）に信玄は8000の兵を率いて信濃に侵攻した。信玄による信濃併合を阻止せんと葛尾城より5000の兵を率いて出陣した。

先陣を承った板垣信方は村上義清の先陣と衝突し、これを打ち破ることに成功した。だが、ここで武田家を支え続けた老臣らしからぬ軽拳に出てしまう。

敵前にて陣を敷き、先の戦いで討ち取った者の首実検を始めたのである。この油断を突くべく義清は全軍に総攻撃を命じた。

義清自身も馬上の人となり、率先して兵を叱咤激励しながら板垣勢に襲いかかった。隙を突かれた信方は満足に兵を指揮する間もなく雑兵に討たれた。

また板垣勢を救援せんとして甘利虎泰・才間河内守・初鹿根伝右衛門が村上勢に挑むも返り討ちに遭い落命した。

いよいよ村上勢が本陣へと迫った時、工藤祐長（後の内藤昌豊）・小山田信有・馬場信房らがこれに当たった。

どうにか村上勢を打ち追い払う事に成功したものの信玄自身も二カ所に傷を負った。

信玄を擁立した功臣である甘利・板垣の両名を失ったことは武田軍にとってなによりの損失であった。

そんな因縁のある地を歩く清則一行。兎にも角にも武田領の信濃に入ることが出来た事からかその足取りは軽かった。

「官兵衛殿。ここは何という地ですか？」

清則が槍を片手に歩きながら聞いた。当時の地図は現代ほど精巧では無く曖昧にしか書かれていないことが多かった。

「ここは上田原ですな。北東に向かうと武田随一の知将と名高い真田幸隆殿の戸石城がありますぞ」

官兵衛はそう説明すると清則は驚いた顔をした。ここはまだ徳川領だとばかり思っていたからである。

それもそのはず、清則は従軍する以外は尾張から一步も出たことがなかったからなのだ。

「なんと！？既に甲斐に入っていたのか！？」

清則が立ち止まりそう問いかけると官兵衛は苦笑いを浮かべた。織田家では戦国屈指の猛将とまで謳われたこの男の別の側面を見られたからだ。

「違つよ、清則殿。ここはまだ信濃ですよ。甲斐はここから南東に向かった方角ですよ」

小一郎が清則に解りやすく説明した。清則は槍の石突きでトントんと地面を軽く叩くと気持ちの良い笑顔を向けた。

「ほー！これが武田の土か！！なんじゃ、尾張と余り代わりはないな！！」

慶次も嬉しそうに笑いながら叫んだ。今の時代における社会通念とこの時代の社会通念には大きく差があるのだ。

そう暢気に笑っていた清則と慶次だったが、突然二人の顔から笑みが消えた。戦場で培った勘が異変を察知したのだ。

今は夕刻。本来ならここにいるのは5人だけであるが……。突然人の気配が増えたのである。

「ざっと……20名と言った所かな？」

慶次が槍の覆いを取りながら聞いた。文字通りその矛先は敵が潜んでいる方へと向けられていた。

「そうだな……。」

清則が太刀を構えて呟く。その目は慶次が矛を向ける先と同じである。

古戦場を駆け抜ける一陣の風……。その風が上田原を再び血で染めようとしていた……。

第四話 高坂弾正（前書き）

やっとPCが直りました。やはり買ってから4年が経つと壊れやすくなるものですね。

第四話　高坂弾正

強風が上田原を駆け抜ける。古来より風が吹かぬ日は無いと言われ続けてきた。

しかしこの日、この時、この場所だけ……。一瞬、世界中の風が止まった気がした。

その瞬間、草むらから数名の男達が飛び出してくる。言つまでもなく守清配下の忍び達である。

忍びとは基本、主の命には忠実である。火の中に飛び込めと言えば飛び込む、死ねと言われれば死ぬ。そう言つ生き物である。

だが……。この時だけは違った。部隊を率いていた守清の命も無く清則達を取り囲んだのだ。

この時彼らは共通の感情を抱いていた。

――恐怖。

忍びとは感情を抱かない生き物である。例えどんな状況下であろうと任務を遂行する為の道具であると自分を見なしているのだ。

しかし、目の前に立つ一人の男から滲み出る殺気に恐れを抱いていた。殺気を身に纏いまるで貴紳のごとき姿に怯えも抱いていた。

そして彼らはこの男の前に立ったことを心底後悔した。

その男はまるで長坂橋で赤子を抱えながら百万もの大軍の中を駆け抜けた唐国の猛将：趙子龍のように見えたとはいえないだろう。

きつと彼らは自分が名も無き雑兵のように思い。『この男には勝てない』と心底恐怖し、不甲斐なくも膝が震えてしまった。

「ほう？そつちから出向いてきてくれるとはな・・・」

清則が声に殺気を孕ませて呟いた。その声に気を呑まれたのか絶好の位置に立っていた忍びですら彼に手出しが出来なくなっていた。

「う、うおおおおおおおおお！！」

忍び達が一斉に清則に向かって手裏剣を投げつけた。懷に潜れないならば手裏剣で殺せばいいと判断した為である。

だがその手裏剣も清則の前に出された槍によつてはたき落とされた。忍び達が槍が投げられた方向を見ると一人の少年が立っていた。

「へへっ。貸し一つだな」

慶次が少年らしい笑みを浮かべて言った。忍び達は任務を邪魔された怒りからかその矛先を慶次へと向けた。

「餓鬼が！！舐めるな！！」

一人の忍びが慶次を盾にしようと掴みかかった。だが、慶次は逆に彼の腕を掴むと地面を勢いよく地面に叩き付けた。

「子供だと思つて甘く見るな！！忍び退治など造作もない！！」

慶次が地面に大の字になって倒れる忍びを踏みつけて咆哮する。それもそのはず、慶次は元々前田の人間では無いのだ。

叔父は伊賀忍びの出とも言われている滝川一益が甥の滝川益氏である。その妹を義父・前田利久が娶り、慶次が誕生した。

つまりは慶次も伊賀の忍びの血を少なからず受け継いでいるのである。

だが、それよりも驚いたのは自分たちが忍びであることを看破されたことである。棄民や夜盗に変装したのを見破られたのはこれが初めてであつたのだ。

「ふむ、忍びとな？ならば無用に殺生することは憚びない・・・」

そつ清則は忍び達を睨み付けると太刀を鞘に戻し拳を握り締めた。つまりは他国に仕える忍びを無闇に斬って被害が及ぶのを避ける為である。

だが忍びから見れば侮辱に他ならない。忍びとも言えども武家に仕える身としてそれなりに武士道の心得がある。丸裸同然の相手を斬っても何の誇りにもならないのだ。

「おのれ・・・ふざけおつて!!」

忍びとしてではなく、武人として憤慨した忍びの一人が清則に殴りかかった。斬りかかったのなら僅かながら勝ち目はあつたかもしれない。

何故なら殴りかかった瞬間に清則の拳打が彼の鳩尾を打った。いや、打ったと言うのは間違いだろう。

文字通り鋭い槍のように彼の鳩尾を穿った。その衝撃からか彼の体は草むらの中まで吹っ飛ばされた。

たかが拳打と侮るなかれ、彼ら武人は戦場では己の全てが武器と化する。手足は金槌のような鈍器と化して時には相手を絶命させるに至る威力を出すのである。

だが清則は手加減をした。彼の頭骨を叩き砕くことも、心臓を止めることも造作も無いことではある。だがあくまで殺すつもりは無く手加減をした。

しかし、手加減をしているとしても・・・彼を気絶させるには十分な威力があった。

「どうした？もう終わりか？」

清則が骨をコキコキと鳴らしながら聞く。その姿はまさに猛虎に匹敵する重圧感を漂わせていた。

この時、忍びの中には川中島の戦いで諜報に当たっていた忍びもいた。彼は毘沙門天の化身と誉れ高い上杉謙信の姿を、今も鮮明に覚えてい

法衣装束に身を包み、まるで本当に毘沙門天が舞い降りたかのような神懸かり的な采配を見た。だが、それ以上に彼自身から放たれる威圧感を今も覚えている。

全ての生き物が彼に屈し、立っていることすら不敬に当たるような威圧感。もし、正面から睨み付けられたら、それだけで心臓が握りつぶされるような殺気だった。

守清は草むらの影から部下達の戦いを、まるで苦虫を噛み潰したような顔で見っていた。

なんたる無様、なんたる無謀、なんたる無策。北条が風魔衆にも匹敵すると言われた武田の忍衆にあるまじき戦い様だ。

だが、それと同時に・・・彼の武人としての血が疼き始めていた。

『この男と戦いたい』。

それは戦国最強を自負する武人であれば、誰もが望むであろう願望。そして同時に、乱破衆の頭として、自分は影に徹しなければならな
いと言っ自制心も働いた。

本当なら、直ぐにでもここから飛び出して彼と手合わせしたい。だが、忍びの頭である自分が負ければ、武田の権威も地に落ちるやもしれぬ。

（どうしたものか・・・）

守清が葛藤に悩んでいると、ふと後ろに人の気配を感じた。忍びが後ろを取られるとは何という無様なッ！！

「む？守清殿ではないか、このような所で如何した？」

「だ、弾正忠様!？」

高坂弾正忠虎綱、後の世では高坂弾正忠昌信と伝えられるその人である。

武田四名臣が一人。先の川中島の戦いでは妻女山の別働隊を指揮し、信玄を窮地から救った知勇兼備の名将である。

また、『逃げの高坂弾正』と言う渾名の通り。慎重な采配と見事な退却戦指揮能力を持ち合わせおり信玄に大変重宝された人物である。ここで補足するが、この時代の戦は攻めより退却戦の方が遙かに困難なのである。

何故ならば、退却ともなれば味方は浮き足立ち、足輕達是我先にと逃げ出すのが常である。そんな中で指揮を執るのは非常に困難である。

更に敵は勢いづいて追撃してくるであろう、その追撃を引き留めるか。あるいは何らかの策を用いて敵を足止めする、殿役と言っても過言ではないだろう。

また、高坂弾正と言えば四名臣の中で最後まで生き延びた一人である。(山県昌景・馬場信春・内藤昌豊の三人は長篠合戦で討死にしている)

今は海津城代として对上杉の備えをしているはずの御人が、何故甲府にいるのかと守清は不思議に思った。

「ハッハハハ。ちと御館様に用があつてな。その帰り道じゃ」

あつさりと笑いながら高坂は応える。そのあつけらかんとした態度に守清は少々呆れながらも、頼もしく思った。

「それに・・・なにやら戦の気配がしてな。したらば、そこにお主がおる訳だ。これはただ事ではなかるう？」

流石は四名臣随一の知将と誉れ高き高坂である。直ぐにこの場の異変に気が付き、直に守清を問い質した。

守清は『流石は高坂弾正様じゃ』と観念し、信玄から与えられた任務について話した。本来ならば忍びとしてあつてはならないことだが、相手は武田の重臣である高坂に話したところで何ら咎められることはないだろうと踏んだのだ。

一方の高坂は守清の話を聞くや否や、少し呆れたような顔をして清則達に目を向けた。

「・・・ほう、なかなか良い面構えをしておる。御館様がご執心なのも肯けるが・・・何、ワシに比べればまだまだじゃな。しかし・・・」

高坂が清則の姿を確認すると、かんらかんらと笑って応えた。高坂と言えば信玄の衆道の相手をさせられたことでも有名である。

この時、高坂は信玄が新たな小姓を探しているのだろうと思っていたが。彼から放たれる闘気を感じ取るや否や、考えを改めざるを得なかった。

「どれ、ワシが相手をしてくるとするか」

「だ、弾正忠様！！危のうございます！！ご無礼ながら、ここは私が！！」

守清が追いつがるように高坂を止めようとしたが。高坂はクルリと振り返ると実に清々しい笑みを浮かべた。

「ほほう？お主はワシが、あの童に遅れを取ると申すか？それこそ無礼じゃぞ。」

実に武人らしい笑顔を浮かべ、高坂は草を掻き分けて行った。高坂の武勇を知っている守清は彼を説得する言葉を見つけることが出来なかった。

第五話　異形の構え

高坂と守清が話をしている間、清則達と忍びの間にも動きがあった。どうしたものかと攻めあぐねていると、旅の一行の中に女性の姿を見つけたのだ。清則の恋人であり、半兵衛の娘である千里である。

これ以上、無様な姿を見せつけては武田の沽券に関わると踏み、強政策に出ざるを得なかった。

「き、貴様！！何を！！」

「退けッ！！女、来い！！」

「きゃっ！！は、離しなさい！！」

千里を庇うように立ちはだかった小一郎を体当たりで弾くと、千里の首を腕でがっちり固め、人質としたのである。

「清則殿！！千里殿が！！」

官兵衛が慌てて清則に叫んだ所で、清則と慶次は己の迂闊さを恥じた。

正面からの戦では敵わぬとなれば、搦め手を攻めるのは兵法の常道である。当然、自分たちの弱点である千里に手を出すはずだったのだ。それをすっかり忘れてしまっていたのだ。

「ひ、卑怯者め！！武人としての心意気は無いのか！！」

「黙れッ！！大人しく降参しないと、この女の首を折るぞ！！」

慶次が一喝するも、恐慌状態に陥った忍びは聞く耳を持たず。ギリギリと千里の首を締め上げ始めた。

これには流石の清則も二の足を踏んだ。千里は自分の思い人であり、それを目の前で殺されるのは耐え難い苦痛に他ならない。

「こん……のッ！！千里殿を離さんか！！」

小一郎が手近にあった石を掴み、忍びの頭を思いつきり強打する。流石に強靱な肉体を持つ忍びと言えども、この一撃は堪えたらしく、千里を手放してしまった。

……それが彼の運の尽きだった。

彼がぐらくらする頭を抱え、立ち上がった時。彼の目の前に清則の姿は無かった。文字通り、視界から完全に消えていたのだ。

「う、上じゃ！！」

仲間の声でハッと上を見上げれば、跳び蹴りの姿勢で今まさに自分に突っ込んでこようとする清則の姿が見えた。

この時、忍びは本能からか顔を両腕で庇ってしまった。誰もが顔が攻撃されようとすれば顔を防ごうとするものである。

だが、彼はここで三つ目の間違いを犯してしまった。

一つ目は千里を人質にとってしまったこと。

二つ目。本気で清則を怒らせてしまったこと。

そして。三つ目は、避けずに直撃を許してしまったことである。

重さ数十キロはありと言われる鎧を身に纏い、戦場を駆ける武将。更に清則は元は農民である、故に足腰の強さは並の人間とは桁外れの強さを誇っていた。

そんな彼の跳び蹴りである。とても、両腕だけでは防ぐことなど出来ようものか。

ボギボギと忍びの両腕から骨が砕ける音が響き。あらぬ方向へとグニヤリと曲がる。折れた骨は筋肉を突き破り皮から出てしまっている。

「ぎ、ぎあああああああああああああああ！！」

激痛に忍びが吠える。忍びと言えども・・・いや、誰であろうとこの痛みは耐えられる物ではない。挙げ句、怪我の度合いから彼の両腕は二度と使い物にならないであろう。

痛みに悶え苦しんでいるにも関わらず容赦なく、清則の蹴りが飛ぶ。今度の彼の狙いは首の骨である。

人間の骨で重要な箇所は背骨と首の骨である。各種神経が通っているそこを折られた場合、即座に体の全ての機能が停止し、確実に死に至るのだ。

その瞬間、彼は自分の愚行を悔いた。だが、既に時は遅く……全
てに判決を下す閻魔の鉄槌は下ろされてしまった後である。

ボギイと言う鈍い音が上田原に木霊する。彼の首はくの字にひしゃ
げ折れ、白目を向きながら崩れ落ちた。

「次は……誰だ？」

ハアーハアーと肩で息をしながら振り返る鬼神。自分が倒した敵に
は目もくれず、次の敵を求めて忍び達を一睨みする。

もはや誰もが敵わぬと心胆が氷り付いたその時である。上田原に飄
々とした声が響き渡った。

「ハッハハハ。まさに鬼神よのお……」

怖じ気づいてしまった忍び達を掻き分けながら清則の前に立つ男。
誰であろう、高坂弾正忠虎綱その人である。

忍び達は彼を見るや否や、地面に膝を立てて頭を垂れた。その姿か
ら清則も彼がただ者では無いことを武人の勘で感じ取った。

「貴公がこの忍びの元締めか？」

「いいや、違うぞ。ワシは武田の一家臣じゃ」

殺氣を向けてくる清則に対して、悠々と自己紹介をする高坂。流石
は武田の名臣、殺氣と血まみれの戦場を抜けてきた強兵は殺氣如き
には遅れを取らぬと言わんばかりの態度である。

「武田の家臣がワシになんの用だ？」

「ハッハハハ。流石は織田の鬼須藤と言った殺気じゃ」

高坂の言葉に清則の眉がピクリと揺れる。一応、隠密での旅となっており、目の前の男が自分の名前を知っているとは思ってもいなかった。

「何故・・・」

「何故、お主の名前を知ってるかと？簡単な事じゃよ、お主が隠密の旅に出るには・・・ちと有名になりすぎたからじゃよ。今川攻めであれだけの武功を挙げれば、嫌でも名は知れるもんじゃよ」

「・・・」

「ハハッ、自覚は無しか。本当に変わった男よ」

「それで、何が望みだ？」

「ふむ。ようやく本題に入れるな・・・お主、仕えるべき主は見つかったか？」

「いや、諸国見聞の最中だが」

「ならばよい。単刀直入に言う・・・御館様にお仕えせぬか？」

「・・・嫌だと言ったら？」

「お主程の男が上杉に付くのも脅威じゃ・・・ここで斬る」

瞬間、二人を包む空気が一変する。高坂も温厚そうな顔に溢れんばかりに闘気を滲ませて、清則と間合いを計る。

清則は直感で素手での勝負は危険だと判断した。高坂は半身を捻り、拳打の構えを見せているが、右手は常に太刀の柄を握りしめていたのだ。

もしも、素手で殴りかかろう物ならば間接を捻り上げられて抜き身の一刀の元に斬り捨てられるだろう。

飛びかかったとしても避けられてしまえばそれまでである。どう考えても素手で相手をするには分が悪いとしか思えなかった。

そう判断した清則は、右手で槍を握りしめ、左手で小太刀を握りしめて構えた。

異形の構えに高坂は背中に嫌な汗を掻いた。槍で掛かってくれば懷に入ればよい、だが小太刀を持つことで懷に入られた時の備えも出ている。まさに戦場で培った叡智が結集された構えだった。

「・・・」

「・・・」

両者が睨み合って既に半刻が経過しただろうか。それでも両者は動かない。この仕合は先に動いた方が負けであると両者は直感で悟っていた。

ただ無駄に時が流れるだけの上田原。二人は互いに睨み合ったまま動かない……。直ぐ傍に忍び寄る影にも気が付かぬまま……。。

第六話　清則、英雄を論じる

「その死合ッ！！待った！！」

突然の叫び声に二人は同時に声の主の方を向く。着物を着た老人と才気活発そうな若者が数百の兵を率い、二人を取り囲んでいたのだ。

「守清からの連絡が遅いと思ったら・・・何故、源助（高坂の幼名）がここにおるのだ？」

「幸隆殿・・・」

「源助、御館様の用事は終わったのだろうか？ならばさっさと海津城に帰るがよい、上杉めの備えであるお前が城を開けてどうする」

「・・・分かりました」

高坂はまるで親に叱られる子供みたいに頂垂れると、清則に目配せをし海津方面へと歩いて行ってしまった。

流石の高坂と言えども、信玄から全幅の信頼を受けている幸隆には逆らうことが出来なかった。

それ以前に、高坂は幸隆のことを師と仰いでいる部分が少なからずあり。真田の一族とは懇意な仲でもある。

勝負に水を差されたと言わんばかりに不機嫌そうな清則の視線に気が付いたのか、幸隆は清則に向かって深々と頭を下げ始めた。まるで一国の城主に対するような礼である。

「上田城城主、真田幸隆と申します。某の領内で夜盗に襲われるとは、某の不徳とするところです。どうか、平にご容赦を」

「幸隆が三男、昌幸と申します。せめてもの謝罪として、今夜は我が城にお泊まりいただけないでしょうか？」

ヤケに腰の低い態度に清則は一瞬、解答を躊躇ったが。目の前の老人と青年から殺気も鬨気も漂って来なかった為、素直に従うことを選んだ。

上田城

城に付いた一行は現地で採れた山河の珍味と真田の名酒で持て成され、すっかり気分を良くしていた。

宴もたけなわと言った所で、幸隆は『この上田城には湯治場があるので、そこで汗を流しては如何か？』と薦められたので、清則は少しだけ酔いの回った千鳥足で湯殿へと向かった。

「某がご案内致します」

昌幸が先頭に立ち、清則を案内して行く。

上田城はさほど大きな城では無いが、この時代の城には侵入者対策用の罾が多数設置されており、城によほど詳しい者でなければ、忽ち命を落す危険があったのだ。

「面目ない・・・」

清則はフラフラと壁に手を付きながら、昌幸の後に続いた。真田の名酒である濁り酒をしこたま飲んだせいで頭は重く、考えることすら億劫になっていた。

そして、ヤケに大きな一枚戸の前で昌幸はぴたりと足を止め、『ここが湯殿になります』と丁寧に通した。

戸を開けると、そこは脱衣所になっており。その先には天然の岩肌に囲まれた露天風呂となっていた。

「おゝ。これは見事な」

まるで真田の秘湯と言わんばかりに広い露天風呂に清則はすっかり感心していた。

素早く着衣を脱ぎ捨てると、禪も脱ぎ捨て。子供みたいに湯に飛び込んだ。

乳白色の湯は熱すぎず、温すぎずと文字通り適温で。こんな広い露天風呂を一人で味わえるとは、まるで大名になったような心地がした。

「絶景かな・・・ふあゝ・・・」

体が温められたことにより、体内のアルコールが活性化され。清則の酔いは極限に達してしまい、岩肌にもたれ掛かったまま船を漕いでしまった。

どれぐらい眠っていたらう。脱衣所に誰かがやってくる気配に清則は目を覚ました。

きつと真田の者だろうと清則は安心しきり、バシャバシャとお湯で顔を洗い始めた。

「・・・様!!・・・も・・・に!!」

「・・・ぬ。・シー・・・十分・・・や」

ヤケに騒がしいなと清則は怪訝な顔をしたが、戸が開くと同時に何故揉めていたかの理由が分かった。

初老の男性が幸隆・昌幸と小さな子供を引き連れて、湯殿に入ってきたのだ。清則は幸隆達に軽く会釈すると初老の男性をチラリと見た。

とても初老とは思えぬ程引き締まった体。まるで千里先まで射抜くような鋭い視線に、威厳たつぷりと言った顔をした坊主頭の男性だった。

それ以上に体中に刻まれた傷から、彼がただ者では無いと言う気配を感じ取って、自然と身構えてしまった。裸にもかかわらず、その体からただ漏れる重圧感に清則は息を呑んだ。

「幸隆殿。そのお方は・・・どなたか？」

清則の問いかけに幸隆は身を強ばらせた。余程位の高い男なのだろうかとタカをくくっていた。

「何、ただの隠居の爺じゃよ。ご一緒してもよろしいかな？」

初老の男性がカラカラと笑いながら歩み寄ってきた。清則は少し考え込むと、静かに頷いた。上田城に隠居なんていたかな？と首を傾げるが、体中に回ったアルコールからか考えるのを止めた。

すると彼は清則の隣に腰を下ろすと、深い溜息を付いた。その姿が何とも性に合っているなと清則は苦笑する。

一方の幸隆達はどうにも落ち着かない顔をして、二人を取り巻くような形で湯に身を沈めた。

「やはり湯は良いのお。この世の憂さを洗い流してくれる心地じゃ」

「ご老体と言えども、世に憂さを感じるのですか？」

「この戦乱の世に生きる者としては当然じゃろ。戦ともなれば民は苦しみ、土地は荒れ果てる・・・それは見るに耐えないもんじゃよ」

「では、ご老体は誰が天下に近いと思いますか？」

清則が何気なく投じたこの疑問に、幸隆達は苦笑いを浮かべて解答を待った。

彼はしばらく考え込むような素振りを見せると。濡れ手ぬぐいを頭に乗せ、静かに語り始めた。

「天下に近いだけじゃ駄目じゃ。天下の主に対応しい器でなければ、天下は治められん。足利も器に相応しくないから・・・こうして世

が荒れたのじゃよ」

「なるほど、正論ですな」

「お主は誰が天下人に相応しいと思う？」

「そうですね。織田信長公はどうですか？」

「信長か。ヤツは確かに強いし、家臣を上手く統率しておる。だが、恐怖による統治は長続きしないのが通例じゃ」

「・・・徳川家康公は？」

「ヤツは長い目で見れば・・・一番天下に近いかもしれん。だが、まだ若すぎる。世の酸いも甘いも知らなければ天下を治めることは出来ん」

「では、武田信玄公はどうですか？」

その言葉に彼も幸隆達もピクリと動く、単なる興味からであつて。別に深い意味はなかった。

彼はふうと溜息を付くと、ゆっくりと夜空を見上げて呟き始めた。

「・・・信玄か、ヤツは駄目だな。とてもじゃないが、天下を治める器では無い」

「今や破竹の勢いと言われる武田家でも・・・駄目だと？」

「ああ、全く持って駄目だ。信玄は人間ではなく、畜生じゃ。甲斐

を手に入れる為に実父を追放し、今川を攻める為に実子を死に追いやった……。ヤツが天下を治める器では無いことは明白よ」

その答えに清則はギョツとした。武田家の重臣である真田一族の前に、これだけ主君をボロクソに貶められれば、その場で斬り捨てられても文句は言えないのである。

だが幸隆を始め、真田の者達はどこか悲しそうな顔を浮かべて俯いたままだった。

「信玄も駄目となれば、北条・上杉・毛利・大友も駄目じゃな。今はこの日本に戦乱を収める英傑がおらんのが……。ワシの憂いじゃ」

「なるほど……」

「それより、お主。信玄に会ってみたくはないか？」

「信玄公に？」

「ああ。お主なら、信玄の信玄を止めることが出来るかもしれぬな」

期待に満ちた目を向けられ、清則は慌てた。甲斐の虎である信玄公を自分如きが止めるなどと……。そんなことが出来ようはずはないと答えた。

「あの平八郎を止め、今川に引導を渡したお主なら出来よう。さて、もう遅い。ワシはこれで帰るとしよう」

彼はそう言うのと立ち上がり、真田の一族を引き連れて風呂から上が

っていった。残された清則はしばらく考え込む素振りを見せると、静かに立ち上がった。湯殿を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5905a/>

戦国鎮魂歌～ある漢の天下取り～

2010年10月8日23時13分発行